

歌の話

折口信夫

青空文庫

うたはなし
歌の話について

この度、高濱虚子さん・柳田國男先生と御一しよに、この一部の書物を作ることになりました。その高濱さんの御領分の俳句と同様に、短歌といふものは、ほんとうに、日本國民自身が生み出したもので、とりわけ、きはめて古い時代に、出來上つてゐたものであります。さうして、それが偶然、私の先生でもあり、またあなた方のこの文庫におけるおなじみでもある、柳田國男先生がお書きの諺の成り立ちとも、原因が並行してゐるのは、不思議な御縁だとおもひます。

一、短歌の起り

短歌は、唯今では一般に、うたといつてゐます。けれども
大昔には、うたと名づくべきものが多かつたので、そのうち、
一番後に出來て、一番完全になつたものが、うたといふ名
を専らにしたのであります。

かういふと、不思議に思ふ方があるかも知れません。あなた方の
の御覽の書物には、たいてい短歌の起りを、神代のすさのをの
尊のお作からとしてゐるでせう。もちろんこれは、古くからのい
ひ傳へで、あなた方が、古代と考へてゐられる奈良朝よりも、

もつとく以前から、さう信じてゐたのです。だからその點において、そのお歌が、第一番のものでなくとも、何も失望する必要はありません。

短歌の出来るまでには、いろんな形をとほつて來てゐます。第一に、世間の人は、短い單純なものゝが初めて、それが擴がつて、長い複雑なものとなるといふ考へ方の、癖を持つてゐます。ところが、物質の進化の方面と、精神上のことゝは反對で、複雑なものをだんだん整頓して、簡單にして行く能力の出來て來ることが、文明の進んでゆくありさままであります。短歌などもそれで、日本の初めの歌から、非常な整頓が行はれくして、かういふ簡單で、思ひの深い詩の形

が、でき出来て来たのであります。

二、ことわざ諺と、うた歌と

いまひと、かんが
今の人の、考へることの出来ないほど古い、遠い祖先の時代に
は、となごと稱へ言といふものがありました。それが、すこすこも少し進むと、も
のがたりといふものになつて来ました。さうして、この二つなが
ら、なら竝んで行はれてみました。その稱へ言が、こんにち今日でも、やしろ社
々くの神かんぬし主さんたちの稱へる、祝詞なのであります。この二つ
の言葉は、もと元、にっぽんこだい日本古代の神様のおつしやつた言葉として、
しん信じられてゐたのですが、そのうち、だんくその言葉のうちに

もつと、押しつめた短い部分を、神様の言葉と考へ、その外の
 言葉を、軽く考へて来る傾きが出来て来ました。だから稱へ言の
 うちにも、神のお言葉があり、ものがたりのうちにも、神のお言
 とぼ葉が挿まれてゐるもの、と考へ出したのであります。この稱へ言
 のうちのある部分が、諺となり、ものがたりの肝腎な部分が、
 歌となつたのであります。神様と申し上げる方は、尊くもあり
 また、恐ろしくもある方で、われ々の祖先におつしやつた言葉
 は、祖先の人たちが恐れ慎しんで承り、實行しなければならな
 い命令でありました。ですから、稱へ言全體が、元は命令
 の意味を持つてゐました。その長い命令の言葉のうちに、それ
 を押しつめたものが出来て来たことは、既に申しました。これが、

たいてい古くは、大體二つの句に、纏まるものだつたようです。
ところが、その稱へ言から變つた、ものがたりのうちのうたも、
その理くつをいへば、意味がはつきりして來るとおもひます。つ
まり、神様の仰せに對する、お答へであります。いひ換へて見
ると自分の心がわかつて頂くように、説明をし、お願ひをし、
お詫びをするもので、根本の精神においては、このとほり、
私どもは服従申してをります、といふ誓ひの意味になります。
ですから諺は、命令の意義から、だんく變化して、社會
的の訓戒あるひは、人間としての心がけを説くといふ方面
に、意味が變化して來ました。それと共に、時代が移ると、言
葉の意味や、昔にいひ習はしたわけが、わからなくなるために、

後世こうせいでは、なんの理りくつもわからない『いひ習ならはし』となつて
 しまつたのであります。このことは長ながく申まをさずとも、柳田先やなぎだせんせ
 生いのお話はなしで、も、おわかりになること、おもひますから、私わたくしの
 分擔ぶんたんに、關係かんけいの深ふかいところばかりでやめておきます。
 さて歌うたは、どこまでも、自分じぶんの心こゝろを詳くはしく、相手あひての心こゝろを牽ひくよ
 うにいひ出だすものであります。そして、低ひくい神かみさま様あるひ、或あるひは位い置ちの
 高たかい人にんげん間まから、神かみさま様まをに申あし上あげる言ことば葉はが、次しだい第だいに、人にんげん間まど
 うしのいひかけいひあはせる、かけあひの言ことば葉はに、利り用ようせられて
 來きました。さうして、神かみさま様ことばの言ことば葉はすらも、やはり、歌うたで現あらはされ
 ることになりました。それは大おほ方かた、三みつつの句くの形かたちになつたもの
 らしく考かんがへられます。

三、歌のいろく

この三つの句の形の歌を、後には、片歌といつてゐます。これは、歌の半分といふことなく、完全でない歌といふことであります。中には片歌を、短歌の半分といふように思つてゐる人もあるが、これが完全になると、旋頭歌（せんとうか）は読みません。習慣で、せどうかといふのです）といふ形が出来ます。

片歌は、三句から出来てゐて、一番めの句が五音、二番めの句が七音、第三の句がまた七音、といふふうになつてゐる

るのが普通で、その音數には、多少の變化があります。これは、歌ひ延したり、縮めたりしたからでせう。

神武天皇が、大和の國のたかさじ野といふところで、後に皇

う／＼さま

后様になられた、いすけより媛といふお方に、初めてお會ひ

なされた時、お伴のおほくめの命が、天皇様の代理で、お媛さ

まのところへ歩み寄つて、ものをいひに行くと、いすけより媛は、

おほくめの命の目のさいであるのに氣がつかれて、歌をうたひか

けられました。目をさくとは、眦を、刺のようなもので割いて、

墨を入れて、黥をすることをいふ、古い言葉であります。その文

句は、昔の大學者たちも、わからないと申してゐる、むつかし

いもので、これから先、あなた方のうちから、説明して下さる

人が、出て来るかも知れません。

あめつゝちとりましとゝ 何故 黥ける 利目

お前の目は、なぜそんなに黥がしてあるのか、といふ以上、確かな説明の出来た人がないのです。

これに對して、おほくめの命は答へました。

をとめに たゞにあはむと わが黥ける 利目

あなたのような美しい、若いお嬢さまに會ふために、私が黥をしておいた、この眦の黥です。

なんのために、黥することが、さうした目的に適ふのかわからないが、歌の意味はともかく、さうに違ひありません。御覽のとほり、初めの句が、四音になつてゐるが、ともかく、5・7・

5といふ三つの句の形を、基礎としてゐます。これが、われく
 で知れる限りの、歌の古い形で、このように五音でなく、四音で
 あるのと反對に、五音・七音であるところを、音數多くし
 たものもあります。現に、この歌と同様に、おほくめの命と神
 武天皇とのかけあひに謠はれたといふ歌が、それでありませう。
 やまとの たかさじ野を、なゝ行く をとめども。たれを
 しまかむ（おほくめの命）

×

かつ／＼も、いやさき立てる 長をしまかむ（神武天
 皇）

この大和のたかさじ野を、七人通るをとめたち。そのうち

の誰を、お后になさいますか。

ちつとばかり先になつてゐる、あの年長者を、后にしよ
う。

この二つの歌について見ると、片方は、4・6・4・5・7
といふへんな形になつてゐるが、大體、短歌の5・7・5・7
・7といふのと、句の數も似てゐます。それでは、これが短歌か
といふと、第一、片歌の約束に叛きます。片歌は、片
歌どうし合せるもので、けつして、短歌と一組みにはなりません。
ん。さうすると、おほくめの命の歌も、片歌の音數を増して、
早く謠はれたものとおもふ外はありません。最初の一句は、
『やまとのたかさじ野』の十音から出來てゐます。二番めの

句は、『なゝ行くをとめども』の九音が、七音の句の長さで謠はれた、といふことが考へられます。さうして見ると、この時、二對の片歌の、かけあひがあつたのです。けれども、うっかり見ると、そのうちに、短歌の古い形のようなものが、混つてゐるようにも見えます。もちろん、かういふ音數の多い片歌も、三句から出來てゐるのだといふことを忘れて、五句になつたところからも、短歌は、出來て來るのであります。だから、この長い片歌は、短歌の歴史の上から、疎かに出來ない材料であります。

四、やまとたけるの尊のこと。並びに旋頭歌

おなじような片歌かたうたの話はなしが、やまとたけるの尊みことにもあります。
 この尊東國平定みこととうごくへいていの時とき、甲斐かひの國酒折くにさかをりの宮みやに宿やどられて、火ひを
 燃もしてゐた翁おきなに、いひかけられました。

にひばり つくばを過ぎすて、いく夜よか 寝ねつる

あの新治にひばりの近邊きんべんの筑波つくばをとほり過ぎすて、今夜こんやで幾いく晩ばん寝ね
 て來きたとおもふ、といはれたのです。

かゝなへて、夜よには こゝの夜よ。晝ひには とをかを

指折ゆびをり屈かめて 勘かんじよう定じやうして、今こんばん晩ばんは、夜よで申まをせば、九こゝのば

晩ばん。晝ひるで申まをせば、十日とをかを經過けいかいたしましたことよ。かうい

ふお答こたへをしたのです。

これは、前の神武天皇様方の御歌よりも、もつと名高く、
 傳はつてゐます。それは、この二つの片歌を連歌（れんが）と
 いふものゝ初めだ、と信じてゐるからであります。ところが、さ
 ういふふう^{かんが}に考へるのなら、もつと時代の古い、神武天皇頃^{じんむてんのうころ}の
 片歌問答の方が、連歌の初まりだ、といつてよいわけではあ
 りませんか。まづ、日本の歌においては、長い形^{ながかたち}のものがたり
 から、次第^{しだい}に變化^{へんか}して、長歌^{ながうた}（ながうた）といふものが出來て
 來た一方^{き いっぽう}に、そのうちえきすとも、えつせんすともいつてよい
 片歌^{かたうた}が、二つ合^{ふた あは}さつて、旋頭歌^{せとうか}といふものに發達^{はつたつ}して行く^ゆと
 どうじに、片歌^{かたうた}自身が、短歌^{たんか}を作り上げる^{つく}ように、次第^{しだい}に、音^{おん}の
 數^{かず}を増^まし、内容^{ないよう}が複雑^{ふくざつ}になつてゐました。私の話^{わたしはなし}は、短歌^{たんか}の

みならず、日本の歌の大凡に亙つて、知識をお付けしたいと思ふのですから、こんなことから、初めたわけです。それで一口だけ、旋頭歌について申しませう。この歌の形は、つまり、前の問答の歌を一つとすれば、それなのです。萬葉集から例をひいて見ると、

新室を踏み鎮め子が 手玉鳴らすも。

玉の如 照りたる君を、内にと まをせ

新築の家を踏んで、屋敷のわるい魂を鎮め舞ふ女の子が、手に捲きつけた玉を、今鳴らしてゐることよ。その玉のように、輝やいていらつしやる美しいお客様を、どうぞ内らへ、と御案内申し上げてくれ。

このとほり、三番めの句で、かつきりと切れて、四番めの句から、新しく、同じ形をくり返してゐます。それで、頭の句に旋る歌といふ意味で、旋頭歌と名づけられたのであります。中には旋頭歌が、まだ片歌の一組であつた時の姿を、残してゐるものすらあります。やはり萬葉集の、

水門の葦の末葉を 誰か た折りし。

わが夫が振る手を見むと われぞ たをりし

川口の、葦のたくさん生えてゐる、その葦の先の葉が、み

んなとれてゐる。これは、誰が折つたのかと申しますと、そ

れは、私です。私の夫なるあなたの、私を見つけてあひずに

振つていらつしやるお袖を、よく見ようと考へて、私が折つ

たのです。

これなどは、一首のうちいつしゆに、自問自答じもんじとうのように、歌うたつてあります。

五、すさのをみことの尊たんかの短歌

やくもたつ いづもやへがき。つまごめに 八重垣やへがきつくる。

その八重垣やへがきを

この名な高たかい、すさのをみことの尊たんかのお歌うたは、實じつは、よく意味いみがわから
ないのです。でも普通ふつうはかう説明せつめいしてゐます。

幾いくすぢもの雲くもが、どんくと騰のぼつてゐる。その現あらはれてゐる雲くも

の廻つて作つた、幾重の垣のような雲。私の妻を中に入れるために、幾重もの垣を作つてゐる、その幾重もの垣よ。これがわれ々の結婚を祝ふ自然のしるしである。

細かいところになると、昔から多少、別々の意見はあつても、大體かういふふうに、意見が一致してゐます。ところが、私にはせると、意味が大ぶん違つて來ます。

出雲人の作つた、幾重にも取り廻す、屏風・張の類よ。われ々、新しく結婚したものを包むために、幾重の圍ひを作つてあることよ。あゝ、その幾重の屏風・張よ。

このやくもたつといふ言葉が、歌の上でいふ枕詞なので、すなはちこの場合は、いづもといふ言葉を起すための、据ゑること

ばなのです。枕詞は、元の意味のわかるのもあり、わからな
 いのもあります。わかるのは、大體に、新しいものゝようで
 す。このやくもたつなども、古い書物の説明にさへ、幾すぢ
 もの雲が立ち圍んだところから、いはれたものとしてゐます。け
 れども、それはいけないので、ほかに、いづもといふ言葉と、特
 別の關係があつたに違ひありません。

これは結婚に先立つて、新しい家を建てる、その新築の室
 の讚め言葉で、同時に、新婚者の幸福を祈る意味の言葉なの
 です。それはともかくとして、この歌は、あなた方がお讀みにな
 つても、大體わかるほど、意味がよく通じます。ところが、こ
 のお歌よりも、遙かに新しい時代のたくさんな歌が、けつしてあ

なた方ばかりでなく、大人の、しかも専門の學者たちにさへも、わからないものが多いのです。ちよつと考へても、時代が新しくなるほど、歌がわからなくなるといふような、不自然な事實を、あなた方はまともに、うけ入れますか。だからこの歌は、遙かに後世、短歌が盛んになつて後、行はれ出して、その作つた人もわからなくなり、また、非常に重々しい力のあるものと信じられた時代に、こんな歌だから神代の神様で、ことに出雲に關係深い、名高い方のお作だ、と信じられたものに違ひはなからう、と考へてゐます。

大昔の歌には、この歌に限らず、歴史では傳へてゐても、作つた人は別であり、時代も違つてゐると見ねばならないものが、

だん／＼あるのです。

わたしはわたしこのお歌が、神武天皇のお歌だといふ片歌かたうたよりも、古いものだとは、あるひはもつたいないかも知れないが、信じるわけにはまゐりません。短歌たんかの形かたちといふものは、もつともつと、遅おくれて出来たもので、すさの尊みことはもちろん、神武天皇も、やまとたけるの尊みことも、御存じごぞんじにならなかつたに違ちがひない、と考かんがへてゐるのです。

六、景色けしきを詠よんだ歌うた

狭葦川さあかはよ

雲立くもたちわたり、うねびやま

木の葉こはさやぎぬ。

風吹かむとす

さる川から、雲がずっと立ち續いて、この畝傍山、その山の木の葉が、騒いでゐる。今、風が吹かうとしてゐるのだ。

畝傍山 晝は雲と居、ゆふされば、風吹かむとぞ 木の

葉さやげる

畝傍山。それには、山の木の葉が、晝は、雲がかゝつてゐるように、ちつと靜まつてゐて、日暮れが來ると、風が吹き出すといふので、その木の葉が騒いでゐる。

この二首の歌は、疑ひもなく、景色を詠んだ歌であります。畝傍山附近の、小さな範圍の自然を歌つた、いはゆる紋景詩といふものであります。ところが、この歌を讀んだゞけで、別の氣

持ちが浮びませんか。それはなんだか、この歌のうちに、違つた
 氣持ちが隠されてゐる、といふ氣分の起ることでもあります。歌の
 表 面は一 種の譬へで、何か別のことがいつてあるのだらう
 といふ心 持ちが、起りませんか。きつと起るとおもひます。そ
 れで昔の人も、このたゞ 敘景の歌に過ぎない、二種の歌に對し、
 かういふ傳へを語つてゐました。

神武天皇がおかくれになつて後、先に申したいすけより媛が、
 自分のお生みになつた三人の皇子たちを、殺さうとするものゝ
 あることを、むきだしにいふことは出来ないから、かういふふう
 に仄めかして諭されたのだ、と古事記といふ書物にさへ傳へて
 るます。日本の古代の人々、は、かういふふうに、一首の

歌うたについても、何か神なにかみの心こころあるひは、論さとしが含まふくれてゐるのだ、
 といふ考かんがへ癖くせを持つてゐました。その習しゅう慣かんが、久ひさしく續つゞいて
 來きて、ごく近代きんだいに及およんでゐます。だから偶ぐう然ぜん起おこつて來きた、一ひと
 つゞきの歌うたの文句もんくにも、たゞ歌うたの表ひょう面めんの意い味み以外いがいに、何なにか變かは
 つた内ない容ようがありそうな感かんじを持つたのであります。

この歌うたは別べつですが、多おほくさうしたふうにどこからともなく、風かぜ
 の吹ふき起おこるようにはやつて來くる歌うたを、不ふ思し議ぎな氣き持もちで、びく／＼
 しながら、耳みみを立て、聞きいてゐました。さうしてさういふ種しゆる
 類いの歌うたを、一いつ般ぱんに、わざうたと申まをしました。字じでは、童どう謠よう
 とあて字じをします。が、ほんとうの意い味みは、神かみの意い志しの現あらはれた歌うた、
 といふことらしいのです。たゞ多おほく子こどもたちが、さういふ歌うたを、

無心むしんで謠うたひ擴ひろげて行ゆくところから、あて字じをしたのでありませう。
 この二首にしゆの歌うたも、恐おそらく、いすけより媛ひめのお歌うたでも、お作さくでもな
 く、またさうした悪あく人にんが、騷そう動どうを起おこさうとしてゐる、注ちゆう意うい
 をなさい、といつた意味いみのものでもありませんまい。それにしても、
 こんなに古ふるい時代じだいに、このような敘じよけい景けいの歌うたが、歌うたはれるわけは
 ないので。その證しやうこ據こは、これから以後いご、ずっと遙はるかな後のちまで、
 ほんとうに景けしき色しきを詠よんだ歌うたといふものが、出でて來こないのでありま
 す。いくらか、さうしたものゝ見みえるのは、或あるとき時とき仁にん徳とく天てん皇かう
 が、吉備きびのくろ媛ひめといふ人ひとを訪ほう問もんせられたところが、青あを菜なを摘つ
 んでゐたのを見みて作つくられたといふお歌うたであります。

山やま縣がたに蒔まける青あを菜なも、吉備きびびと、共ともにし摘つめば、たぬ

しくもあるか

天子てんしの御料ごりょうの、畑はたけのある山やま里ざとに蒔まいた青菜あをなも、その吉き備びの國くに人びとと、二人ふたりで摘つんでみると、氣きがはれ／＼とする
 ことよ、といふ意味いみのことをいはれたのです。

これなどは、まづ自然しぜんのものに對たいして、緻密ちみつに觀かん察さつをしたもの、書物しょもつに出でたはじめといつてよからうとおもひます。山やまがたといひ出だして、土地とちの様子ようすからその性せい質しつを述のべて、そこに青あをくめ、芽めを出だした野菜やさいの色いろを、印象いんしやう深しんくつかんで、示しめしてゐます。それ以前いぜんの歌うたは、皆表みなひようめん、面めんは景色けしきを詠よんだように見みえても、ほんとうに味あじはつて見みると、たゞのうはつただけのところ
 で、實際じつさい景色けしきを見据みゑたものだ、といふことが出で來きません。

かういふふうに、ごくわづかづゝ、自然しぜんに對たいする見方みかたが据すわつて
 來きました。そして、ほんとうの敍景詩じよけいしといふものが出來上できあがるの
 は、奈良朝ならちように近ちかくなつてからのことであります。或あるひは、もつと
 精確せいかくにいふと、奈良朝ならちようになつてからといはなければならぬ
 かも知しれませんが。それにも拘かゝらず、神武天皇じんむてんのうの時分じぶんに、ちゃん
 とあゝいふ調とゝのつた、景色けしきの歌うたがあるといふことは、どうしても、
 不自然ふしぜんなように考かんがへられます。だからこの二首にしゆのお歌うたも、實じつは後
うせい世せいのもので、なんだか、へんな暗示あんじを感じかんさせるところからし
 て、しぜん、畝傍山うねびやま・さる川かは——さる川かはは、いすけより媛ひめのお
 屋敷やしきのあつた所ところ——などいふ地名ちめいから、歴史上れきしじようの事實じじつに結むすびつ
 けて、考かんがへられたものだとおもひます。

七、旅行の歌

それではどうして、景色を詠む歌が生れて来たかといふと、それはわれ々の祖先が、よく旅行をしたからです。或は、旅行をした時と同じ心持ちで、歌を作る場合があつたからです。旅行をした先で、いつも新しく小屋がけをして、それに宿りました。さうしてかならず、その小屋をほめ讃へる歌を詠んで、宴會を開きました。これを、新室の宴といひます。その習慣は、旅行をしないでも、一年のうちに、かならず一回以上は、自然の村にゐて行つたものでした。毎年、田の穫り

入れがすむと、やはり家を作りかへ、或は屋根を葺き替へたりして、おなじく、新室のうたげを行ひました。かういふ場合にはかならず、建て物の内外にある物を、目に觸れるに従つて詠み出して、それが最後に、一つの喜びの氣持ちに纏まる、といふふうな作り方になつてゐました。

譬へば、萬葉集にある皇極天皇のお歌として、傳はつてゐるものがそれです。

我が夫子は假廬作らず。かやなくば、小松が下のかやを刈らさね

私の大事の方は、假り小屋を作つていらつしやる。がどうも、葺き草がないので、困つてゐられるようだ。そんなにかやが

ないならば、向うに見える、あの小松の茂つてゐる、その下
 のかやをば、お刈りなさいな。

これなどはいかにも、旅行中の新室の宴らしく、明るく
 てゆつたりとした、よいお歌であります。現在かやが、向うに
 生えてゐる、と教へてゐられるではありません。黝くとも、さ
 うして落ちついて宴會を開く數時間前までは、皆で苦勞して、
 かやを刈り集めてゐたのです。その勞力を思ひ出してのお歌
 なのですが、その席上にある人は、皆この經驗をつい今の
 先にしたのですから、このお歌を、きつと、自分自身の氣持ちを
 詠んで貰つたように、愉快な氣がしたに違ひありません。家のう
 ちにゐて、その内外の様子を詠むといふところから、景色の歌

が^{うま}生れて來るのであります。それが次第^{しだい}に進^{すす}んで、旅行^{りょこう}中の^{ちゆう}歌^{うた}にはほんとうに自然^{しぜん}を詠^よみこなした立派^{りつぱ}なものが、萬葉集^{まんようしゅう}になると、だんく^で出て來^きてゐます。

いそのさき漕^こぎ廻^たみ行^ゆけば、あふみの海^{うみ} 八十^{やそ}のみなとに
たづさはに鳴^なく

岩^{いは}はなをば、漕^こぎ廻^{まは}つて行^ゆくごとに、そこ^{ひと}に一つづ^{ひとり}づ^{ひら}展^{ひら}けて
來^くる、近江^{あふみ}の湖水^{こすい}のうちのたくさんの川^{かは}口^{ぐち}。そこ^{つる}に鶴^{つる}が多^{おほ}
く鳴^なき立^たてゝゐる。

八十^{やそ}の湊^{みなと}といふのは、ひよつとすると、土地^{とち}の名^な前^{まへ}で、今^{いま}の野^や
洲^{すか}川の^{かは}川^が口^{ぐち}をいつたのかも知^しれませぬ。さうすると、歌^{うた}の意^い味^み
が、しぜん變^{かは}つて來^きます。がどちらにしても、いかに鶴^{つる}の啼^ない

てゐることが、生きくと寫されてゐます。これがまだ、奈良朝になつたかならない前の歌なのです。高市黒人といふ人の作つたものであります。この人は、日本の敍景の歌の、まづはじめの名人といつてもさし支へのない人で、この後は次第に、かうした方面にすぐれた人が出て來ます。山部赤人なども、この黒人に、似せて作つたと思はれるものがあります。譬へば、

和歌の浦に潮みち來れば、
 瀉をなみ、
 葦べをさして鶴鳴き
 わたる

和歌の浦に潮がさして來ると、
 遠淺の海の干瀉がなくなる
 ために、
 ずっと海岸近くに葦の生えてゐるところをめがけ

て、鶴つるが鳴ないて渡わたつて來くる。

これは、赤あか人ひとの名な高たかい和歌わかの浦うらですが、黒くろ人ひとに、既すでにその
 お手本てほんがあります。

さくら田たへ鶴鳴たづなき渡わたるあゆち瀉がた。潮干しほひにけらし。たづ鳴なき
 渡わたる

さくらといふところに、田たの作つくつてあるところへ、鶴つるが鳴ない
 て渡わたつて行く。その手前てまへにあるあゆち瀉がた。そこは潮しほが退ひいて
 るに違ちがひない。それであゝいふうに、鶴つるが鳴なき渡わたつて行ゆ
 くのだ。

どちらも今こんにち日ひから見みると、少すこしおもしろみが勝かち過すぎました。
 趣向しゆこうを凝こらしてゐるところが露骨ろこつに見えるが、赤あか人ひとの方は、よ

く讀み返して見ると、いかにもごたく／＼してゐるでせう。殊に、
 二番めの句、三番めの句に、注意なさい。おなじく趣向を
 凝したところはあつても、さくら田への方は、いかにもすつきり
 と、頭に響くように出来てゐます。これはやはり、親と子と、師
 匠と弟子と、先輩と後輩といふほどの違ひが現れてゐるの
 であります。でも、この赤人といふ人は、かういふ傾向の景
 色を詠む歌ひてを亡くして、だん／＼自分の進むべき領分を
 見出して行きました。そしてつひには、日本の歌が、赤人の
 風のものになる時機を、待ち届けたのであります。そのことを
 お話するのには、今一人、赤人の先輩とも、先生ともいは
 なければならぬ、柿本人麿のこゝを申さねばなりません。

八、日本短歌の第一人者、柿本人麿

今度のお話では、短歌と並び稱せられてゐる長歌のことは、省
 きたいとおもひます。がこれは、大體第一章のところでは、
 べてある物語の歌から、變化して來たものと見てさし支へあ
 りません。

柿本人麿は、平安朝の末になると、神様として祀
 られる程の尊敬をうけるようになりました。それは、短歌の上
 の成績によつてゞありますが、人麿が生きてゐた時分、或は
 その後、久しく人麿の評判の高かつたのは、この長歌を作

ちからが非常にあつた點でありました。だがそれと共に、人麿
 が短歌にすぐれてゐたといふことも、誰も疑ふものもなく、更に
 私などからいふと、長歌よりは寧ろ、短歌の方で、立派なものを
 たくさん残してゐます。がこの人の功勞は、それには限りませ
 ん。實のところは、人麿が出て、短歌といふものが、非常に
 盛んになつたのであります。人麿の歌を見ると、なるほど天
 才といふものはえらいものだといふ心持ちが、つく／＼し
 ます。あなた方にも、たゞ昔からのいひ傳へだからといふ以上
 に、ほんとうに、人麿のねうちを知つてほしいと思ふのです。
 實のところ人麿が出るまでは、短歌は、まだ海のものとも山
 のものともきまらないありさまでありました。この人が短歌とい

ふ形かたちを、はじめて獨立どくりつさしたものと見て、まづさし支つかへはない
 と考かんがへます。あんまりえらい人ひとだったので、人磨ひとまろが死ぬしとまも
 なく、いゝ歌うたであれば人磨ひとまろの歌うただ、と考かんがへるようにさへなつて、
 今日こんにちのこ日残にちのこつてゐる萬葉集まんにようしゆうの人磨ひとまろの歌うたといはれてゐるもの
 にも、どこまで、ほんとうに當人とうにんの作物さくぶつか、判斷はんだんのつかぬ
 ところがあります。それと共に、人磨ひとまろの歌うただと傳つたへられてゐな
 いもので、人ひとのために代かはつて作つくつた、この人の歌うたも非常ひじょうにたく
 さんあるようにおもひます。こゝには大體だいたい、まづ人磨ひとまろに違ちがひ
 ないと信しんじられてゐる歌うたについて、少すこし申まをしませう。

あらたへの ふぢえが浦うらに鱸釣すゝきづる海人あまとか見みらむ。旅行たびゆく
 われを

あまさかる 鄙ひなの長道ながぢゆ 戀こひ來くれば、明石あかしの門とより、大や

ままと
和ましま見みゆ

外ほかにも、とほつてゐる舟ふねがある。自分じぶんも舟ふねに乗のつて、旅たびをし
てゐる。あゝして、向むかうとほつてゐる舟ふねから見みれば、われ
ゝをばこの藤江ふぢえの浦うらで、鱸釣すゝぎりをしてゐる海人あまの村人むらびとと見
てゐるだらうよ。この旅りよう行こうをしてゐる私わたしであるのに。

こゝのあらたへもののといふのは、やはり枕まくら詞ことばです。たへは着き
物ものといふことで、手觸てざりの粗あらいものが、あらたへなのです。さう
した着物きものは、山やまの藤ふぢの織維せんいで織おつたものが多おほかつたので、藤江ふぢえの
ふぢを起おこすために、あらたへことばのといふ言葉を、据すゑたのでありま
す。次つぎの歌うた、

われくは、遠い都を離れた地方の長い距離をば、焦れて
 やつて来た。そして、今この時に気がつくど、この明石の
 海峽から内らに、畿内の山々が見えてゐる。

あまさかるは、やはり枕詞で、ひなのひといふ語を起して
 ゐます。意味は、天に遠くかゝつてゐる日といふことなんです。
 それから、ひなといふ言葉には、意味の上では無關係で、たゞ
 音の上に、續けて来たのであります。

やまとしまといふのは、天皇の御領地或は、自分の親しい
 國のことを、しまといつた時代に、やまとの國或は、畿内の國を
 さして、やまとしまといつたのです。けつして、海中の島を
 さしたのではありません。

かういつて來ると、歌が非常に、おもしろくなく聞えるかも知れませんが、一度この意味を頭に入れて、その後度々、讀み返して見て下さい。さうすると、自然にわかつて來るでせう。譬へば、こんな歌になると、さうしなければ、けつして味ひを知ることが出來ません。

印南野も 行き過ぎがてにおもへれば、心戀しき加古の島
見ゆ

なんだかはじめての方には、外國語でも聞いてゐる感じがするかも知れません。印南野といふのは、播州の海岸に廣く互つた地名で、加古川を中 心として、印南郡、加古郡に擴がつてゐます。そして、歴史上名高いところとなつてゐます。こ

の歌では、人麿が都から西へ下つたのか、それとも遠い國から都へ戻つて來たのか、その事情がわかりませんが、この歌を考へる上には、別にさし支へはありません。私はまづ、遠い國へ行く時のものとして見ておきませう。

だんくどほり過ぎて行く。どこも皆なごり惜しいが、今とほつてゐる播州の海岸の印南野も、とほりすぎきれないほどになつかしく思つてゐると、ちようど向うの方に、なんだか、近よつて行きたい心を起させる、加古川の口の、加古の島が見えてゐるといふ意味です。

九、人麿の歌の傳へにいろいろあること

この人の歌は名高かつたので、歌によつて、いろ／＼に文句が變つて傳はつてゐます。この歌にも、五番めの句が、『かこのみなど見ゆ』といふふうに書いた本もありました。そしてその方が、歌としては遙かに勝れてゐると考へます。

沖を通つてゐて、印南野の草原を、遙かに見てゐる。そのうちに、遠く加古川の川口が見えて來た。あの川口は、知つてゐるんだ。なつかしい舟泊りのあるところだ。心細い氣持ちで眺めてゐるのです。さあこれで、も一度、讀み返して下さい。

こんな歌をあげて來ると、人麿といふ人は、かなしい歌ばかり

り詠よんでゐた人ひとのようですが、なか／＼どうして、どつしりとした強つよい歌を、たくさん残のこしてゐます。寧むしろこの方ほうが得意とくいであつたのかも知しれません。

おほきみは神かみにしませば、あまぐもの雷いかづちうへが上にいほりせるかも

この歌は、持じ統とう天皇てんのうのお伴ともをして、雷いかづちの岳をか——また、神かみ岳をかともいふ——へ行ぎようこう 幸さいなされた時ときに、人ひと麿まろが奉たてまつつたものなのです。

天てん皇のうは、神かみ様さまでいらつしやる。それでこの普ふ通つうならば、空そらの雲くもの中なかで鳴なつてゐる雷かみなり、その雷かみなりであるところの山やまの上うへに、小こ屋やがけをして、お泊とまりになつてゐることよ。えらい御ご威い勢せい

だ。

かういふふうに、天皇てんのうを讚美さんびしてゐます。この人の歌うたは、自然物ぜんぶつを寫うつす場合ばあひにも、自分じぶんの感情かんじようを述のべる敘情詩じよじようしといふものゝ場合ばあひにも、實じつに見事みごとに出來できてゐるので、どちらがよいといひ切きることは出來できませんが、世間せけんでは、人麿ひとまろは感情かんじようをうたふのに達たつしてゐた人ひとだ、といふことにしてゐます。私わたしはさうも思おもはないが、先さきに申まをした黒人くろひとと較くらべて話はなすのに便利べんりなため、まづ普通ふつうの考かんがへを採さい用ようしておきませう。

一〇、山部赤人やまべのあかひと

この二人の先輩の歌を手本にして、だんく自分の本領を出して来たのが、先に述べた山部赤人なわけです。この人の歌では、特別に名高いものとして、

み吉野の象山の際の木ぬれには、こゝだも さわぐ鳥のこゑかも

ぬばたまの夜のふけ行けば、楸生ふる清き川原に、千鳥頻鳴く

これなどは、人も認めまた實際にねうちもあるものです。

一體文學などいふものは、一人がよいといひだすと、いつまでもその批評が續くもので誰も彼も、前の人の言葉から離れて考へることの出来ないものであつて、存外つまらないもので

も、むかしひと昔の人が讚めたのだからといふので、あんしん安心してよいものだと思つてゐることがたび／＼あります。あかひと赤人で例を取つて見ると、さき先の、

わか和歌の浦に潮うらみち來れば、かた潟をなみ、あし葦べをさして鶴鳴きわたる

のよななもので、これがよいと思ふようでは、あなた方がたの文ぶん學くを味あぢふ力が足ちりないのだと反省はんせいして貰もらはねばなりません。たにん他人がよいからよいと思ふのは、おも正直しやうじきでよいことですが、さういふのを支那しなの人はうまいひましました。それは、じしよく耳食じしよくといふ言葉ことばで、ひと人がおいしいといふのを聞きくとおいしいと思ふのは、くち口で食たべるのではなくて、み耳みで食たべるのだ。けんしき見識けんしきがないといふ意

味みに使つかつてゐます。書物しよもつはたくさん讀よまなくても、耳食じしよくの人ひとにならぬ用よう心しんが必要ひつようです。歌うたを解かい釋しやくして見みると、吉野川よしのがはの傍そばにある象山きさやまの山やまのま、すなはち空そらに接せつしてゐるところの梢こずゑを見み上げると、そこには、ひどくたくさん集あつつて鳴ないてゐる鳥とりの聲こゑ、それが聞きこえる。

これなどは、高たかい山やまの上うへを見みつめて歌うたつてゐるので、口くちから出で放ほう題だいに作つくつたものでは、けつして、かうはうまくゆきません。

つぎのは、

ぬばたまのは、黒くろいものゝ枕まくら詞ことば。それで、夜よるにも關かん係けいがあります。

夜よるがだんぐ更ふけて來くると、晝ひる見みておいたあのきさゞげの

木のたくさん生はえてゐる、そして、景色けしきのさっぱりしてゐた
 あの川原かはらに、今いまこの深夜しんやに、千鳥ちどりがしつきりなく鳴ないてゐる。
 これも夜静よるじづかに室むろのうちに籠こもつて、耳みみを澄すまし、眼めには、その鳥とり
 の鳴ないてゐる場所ばしょの光景こうけいを、明あきらかに浮うかべてゐるのであります。
 こんな歌うたになると、赤あか人は、人ひと麿まろにも黒くろ人ひとにも負まけること
 はありません。ところが、だんくゝ變へん化かして行いつたと見みえて、世せ
 間けんから騒さわがれてゐるかういふ歌うたを作つくつてゐます。

春はるの野のに すみれ摘つみにと來こし我われぞ、野のをなつかしみ、一ひ
 夜寢とよねにける

あすよりは 春菜摘はるなつまむと標しめし野ぬに、きのふも 今日けふも
 雪ゆきは降ふりつゝ

かういふ歌が、先にいつたとほり、後世持てはやされて、これを學ぶ人が多かつたのであります。後の歌からいひませう。

二三日前に、私はかういふ計畫をした。あしたからは、

こゝで春の若菜を摘まうと繩張りをしておいたこの野に、い

よく摘まうと思つて、朝出て見ると、雪が降つてゐる。き

のふも、降りくしてゐた。今日も、降りくしてゐる。

ちよつとおもしろいとおもふでせう。そのおもしろいと思ふ心

が、文學から縁遠いものなのです。この歌の興味は、ごく

際とい工夫にあるので、若菜を摘まうとしてゐた心に、自然が適

つてくれないといふことを、自分勝手に、つごうよく作り直した

ものであります。或はさういふふうな趣向で作れば、人がおも

しるがると考へて作つてゐる痕が、ありありと見えてゐます。でもこの歌などは、まだよろしい。はじめの歌などになると、とてもいけません。

ゆふべ、實はこの春の野へ、れんげ草を摘みにと思つて來た、その自分が、あんまり野のなつかしさに、家へも歸らないで、つひく、そこで一晩寝て暮したといふ意味です。

この頃のすみれは、今のれんげ草、もつと普通に、げんげといつてゐる花で、あの紫のすみれではありません。

一一、文學のねらひどころ

そんなことはさておいて、この歌の考へてゐるところは、ほんとうのことではありません。あなた方のうちには、すでに風流といふ言葉を御存じな方がありませう。かういふのが、風流な歌といふのであります。

けれども實際、われ々の生活とは關係のないことを歌つてゐるので、文學者だから、普通の人とは違つた考へをしななければならぬと思つて作つたものです。ほんとうにげんげを摘みに來て、野に寝る人がありませうか。狐にでもつまゝれなければ、さういふことをするはずがありません。かういふのがよいと考へるのは、實際の生活から離れたところに、文學があるのだとする考へで、もう今の人とは關係のない、優美といふ趣

味ゆみであります。だからこの歌うたは、全然ぜん嘘うその歌うただといはねばなりません。かうした嘘うそを重かさねくして來きた日本にっぽんの歌うたが、だんく悪わるくなつて來くるのは、もちろんのことであります。で先にさきいつたへいあんちようの古今集こきんしゅうの一番いちばんお手本てほんになつたのは、赤人あかひとのか平安朝へいあんちようの古こ今きん集しゅうのいち番ばんお手本てほんになつたのは、次第しだいに空想的くうそうてきになり、ういふふうのもので、そのために歌うたは、實際じつさいを離はなれ、それともに悪わるくなつて來きました。文學ぶんがくといふものは、われくの實際じつさいの生活せいかつから離はなれたものが、よいのではありませぬ。

萬葉集まんにようしゅうには、まだく上手じょうずな人ひとが、たくさんにゐます。だが日本にっぽんの歌うたの歴史れきしは、とても私わたしのために與あたへられた紙數しすうでは書かき盡つくすことは出來できないので、このへんで切きり上げて、つぎの時じ

代に移ります。

一二、古今集頃の歌

つぎに名高い歌の書物は、萬葉集が書物になつて後、
 百年以上経つてから出た、古今集といふ歌集でありま
 す。これは御存じの醍醐天皇の御代に出来たもので、普通、天
 子の仰せでつくつた歌集の第一番のものだといふことになつ
 てゐます。かうした歌集を勅撰集といひます。勅撰
 集の第一のものであるために、古今集の歌が、それ以後の
 歌の動かすべからざる手本となつてしまひました。

この古今集を見ると、不思議なことには、古今集の出来た
 当時とうじに生きてゐた人の歌うたは、たいていよくなくて、死んで久しく
 なつて、名なさへ傳つたはらない人の歌うた、或あるは宮中みやうちゆうでのお祭りに傳つた
 へられてゐた歌うたなどが、とびぬけて勝すぐれてゐます。それは一たい
 どういふわけでせうか。つまり古今集の時分じぶんには、歌うたはかうい
 ふものだと小ちひさな標ひょう準じゆんをきめてかゝつて、それにあてはまる
 ものを集あつめたから、規き模ぼの小ちひさい、方ほう向こうを誤あやつたものが、多おほく
 出でたわけであります。

古今集こきんしゆうを撰えらんだ人ひとは四人よにんあるが、そのうちもつとも名な高たかいの
 は、あの紀貫之きのつらゆきといふ人ひとであります。この人ひとは、さういふ歌うたを
 詠よむことが上じよう手ずだつたけれども、本式ほんしきの文ぶん學がくらしいものを

つく
作つくることは、ほとんど出で來きませんでした。さうして見みると、やは
り下へ手たといふより爲しかた方たがありません。

一、近あふみ江みより朝あさたち來くれば、うねの野のにたづぞ鳴なくなる。明あけ
ぬ。この夜よは

二、まがねふく吉き備びの中なか山やま。おびにせる、細ほそ谷たに川がはの音おとのさ

やけさ

三、みさぶらひ。み笠かさと申まをせ。宮みや城ぎ野のの木この下した露つゆは、雨あめにま

されり

(一)朝あさ(只ただ今いまの朝あさの意い味みとは少すこし違ちがつてゐます。まだ夜よのあ
けあない時じふん分ぶんをいふのです)立たつて、近あふみ江みの國くにをばやつて來くると、
このうねの野のに、鶴つるが鳴ないてゐることだ。あゝ明あけた。この夜よは。

いかにも、暗い夜の朝に代つた喜びが、『あけぬこの夜は』といふ簡単な句のうちに、漲つてゐるではありませんか。そして暗がりから明るくなつて来て、今まで歩いてゐた道のほとりに、鶴の寝泊りしてゐた沼地のようなものゝあつたことに、氣のついた様子が、明らかに感ぜられます。ほとんど、なんのやかましい思想も強い感情もないが、明るい、にこにこした氣持ちが、われ／＼を心の底からゆすり立てるやうに感じないでせうか。

(二) まがねふくは、枕詞。

吉備の國の中山——美作にある——よ。それが腰のひきまはしにしてゐる、細谷川の音の澄んで聞えることよ。

あなた方は、この歌を見ると、内容がからっぽだと感じるか

も知れませんが。しかしさういふふうにはやがって早合點してしまふようでは、日本の歌はわかりません。日本の歌には、意味や思想から離れて、また特別のねうちを持つたものさへあるのです。そしてその代表的なものがこの歌です。まづ第一に、調子の高いことを感じるでせう。のびやかで、ひっぱり上げるような調子が、ある點まで行つて、ぴったりと落ちつきよく納まつてゐるではありませんか。

かういつても、あなた方が考へて見てくれなければわからないことだが、幾度もくり返して貰ひたく思ひます。意味からいへば、川の音がよいといふだけのことです。そして吉備の中山が帯にしてゐるといふようなことは、別に珍しくもなんともないのであ

るにも拘かゝらず、われくはそれに對たいして、朗ほがらかな氣持きもちを受け
ずにゐられませぬ。この歌うたは、萬まん葉よう集しゆうにも似にたものがあつ
て、

おほぎみの御笠みかさの山やまの帶おびにせる、細谷川ほそたにがはの音おとのさやけさ
となつてゐます。だが私わたしは、前まへの方が好よいとおもひます。なぜ
なれば、『おほぎみの御笠みかさの山やま』といふところに、人ひとの頭あたまが、も
つれを感じかんじます。純じゆん粹すいに單たん純じゆんにすつきりとはひつて來こな
いのです。

まがねてつふくは、鐵てつを吹ふきわけるといふ元もとの意味いみを忘わすれてゐて、
こゝでは、單たんに吉備きびを起おこすための枕まくら詞ことばにすぎませぬ。こんな
單たん純じゆんなうちに、われくの心こゝろを豊ゆたかにする文學ぶんがくの味あぢはひが歌うたに

はあるのです。かういふ味あぢはひは、祖先そせん以來いらい與あたへられてゐる大事だいじなものだから、それを失うしなはないようにするのが、われつとの務つとめといふよりも、われよろこの喜かんびと感かんじなくてはなりません。

三番さんばんめになると大だいぶん複ふくざつ雑ざつで、

(三) お附つきの人ひとよ。お笠かさであると申まをし上げあい。この宮城野みやぎのの上うへからふり落おちる露つゆは雨あめ以上いじょうである。

これは、自分じぶんの大事だいじに思おもつてゐる人ひとに對たいする篤あつい心こころの現あらはれで、何なにもわざなくお附つきの人ひとを呼よんでいつてゐるのではなく、かりにさうしたありさまを、胸むねに浮うかべただけです。獵りように出いかけた人ひとが、露つゆに濡ぬれてお出いでになるだらう。お附つきの人ひとが、お笠かさをさし上あげてくれ、ばよいのかんと感かんじてゐるのを、直ちよく接せつにいひかけたよ

うに、詠よんだのであります。

この歌うたになると、あなた方がたにもおもしろみはわかりませう。だ
 がなほこの歌うたについて、注意ちゆういせねばならぬのは、みさぶらひの
 み、みかさのみ、みやぎの、みが重かさなつてゐる點てんであります。も
 つといふと、みの音おんと關係かんけいの深ふかいま行ぎよう音おんの、まをせ、まさ
 れるのまがあります。これを頭韻とういんといつて、日本にっぽんの歌うたでは、
 豫め計畫あらかけいかくしてかういふことをするのは尠すくないが、偶ぐう然ぜんこんな形かたち
 の出來できることがあります。この歌うたの快うたこころよい調子ちようしも、似にた音おんの重かさな
 つてゐるところから來きてゐるのであります。けれどもこれは、始し
 終じゆうくり返かへされると、あきくするものだといふことを考かんがへなけ
 ればなりません。

その外ほかに、まう二三首にさんしゆ、古今集こきんしゆから勝すぐれた歌うたやら、變かはつた歌うたを附つけ加くはへておきませう。

一三、 在原業平ありはらのなりひら

平安朝へいあんちようのたぐさんの歌人かじんのうち、ことに名高なだかく、また實じつ際いねうちもあつた人ひとの一人ひとりは、在原業平ありはらのなりひらといふ人ひとでありま
す。この人ひとの歌うたは、大人おとなでなければわからない氣持きもちちをあまり詠よ
みすぎてゐるので、今度こんどは説明せつめいをすることは出來できないが、一いち例いをあげると、自分じぶんの親したしくつきあつてゐた人ひとが、行くことゆも
出來できぬところに隠かくれてしまつて後のち、その人ひとのゐた家いへを訪問ほうもんして

ひとりかな
一人悲しんだ名高い歌があります。

つき
月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。わが身ひとつは、もとの
身にして

ちよつと見たゞけでは、わかたつたようでもわからぬ歌です。同じ
ような句が重なつてみると、自然片一方の方は、一部分略す
る習慣があります。この一句、二句は、『月や昔の月にあら
ぬ。春や昔の春ならぬ』といふのがほんとうなのです。歌でなく
普通の文章なら、さう書かねばとほりません。それをかうい
ふふうにして、意味を表す間に、外れ易い氣分を保存しようとする
のが、歌の上の工夫であります。工夫でなくとも、自然にその
作者の心が燃え立つてゐると、かういふふうにつごうのよい氣

ぶんふう 分風あらはかたな現くちし方くちが、口くちをついて出でて來くるのであります。

はるむかしはる 春はるは昔むかしの春はるではないか。月つきは昔むかしの月つきではないか。月つきも春はるも、

むかし 昔むかしのまゝの物ものである。自然物しぜんぶつはさうして變かはらないでゐる

かゝは に拘かゝらず、自じぶん分の身みだけは元もとのまゝにして、さうして……

あと 後は誰たれにも感かんぜられることだから、いひ盡つくさなかつたのです。

つく これはわざといひ盡つくさなかつたといふより、いひ盡つくしたゞけでは

まんぞくでき 満足まんぞく出來でなかつたので、かういふ尻切しりきれとんぼのようになつて

よ ゐるのですが、かへつて讀よむ人の心ひとこころに、深ふかい印いん象しょうと聯想れんそうと

おこ を起おこさせるものなのです。つまりこの後あとへ來くる言葉ことばを補おぎなへば、私わたし

し の知しりあひの人は元もとの身みではないといふ言葉ことばにすぎません。さう

ことば した言葉ことばを入いれるのと讀よむ人の氣持きもちに任まかせるのと、どちらが好よ

いと思おもひますか。

私わたしはこの歌うたが譬たとへば百ひやく點てんの歌うただといふ程ほどには、讚ほめる氣きに

はなりません。が尠すくなくとも、平安朝へいあんちようの短歌たんかのうちでは勝すぐれた

ものであるといふことだけはいいたいとおもひます。いかにもね

ばり強つよい、あきらめにくい悲かなしみの心こころが、ものゝ纏まとひついたよう

に、くねくねした調ちようし子の現あらはれてゐるのが感かんじられませう。かう

いふ歌うたが、この後のちまた一つのお手本てほんとなつて來くるのであります。

しかしながら、完かん全ぜんにこの手本てほんをまねをうせ或あるはのり越こしたと

いふものは、さうありませんでした。

ついでに、秋あきの歌うたのうちから、二首にしゆぬいておきませう。

一四、作者のわからぬ歌に、よい物のあること

蛸ひぐらしの鳴なきつるなべに、日ひは暮くれぬ。とおもふは、山やまのかけ

にぞありける

木このまより漏もり來くる月つきの かげ見みれば、心こころづくしの秋あきは

來きにけり

これは二首にしゆながら、よみ人びとし知らずといつて、作つくつた人ひとのわから
ない歌うたとなつてゐます。ところが、先さきにもいつたとほり、古こ今きん
集ゆうのよみ人びとし知らずの歌うたのうち、勝すぐれたものが多いので、これな
どはどこへ出だしても恥はづかしくない立派りっぱな歌うたであります。

蛸ひぐらしが鳴ないたと共ともに、日ひは暮くれてしまつた、と自分じぶんがふつとき

う考^{かんが}へたのは、山^{やま}のかげが、家^{いへ}の方^{ほう}へさして來^きて、うす暗^{ぐら}くなつたためだつたのだ。

かういふ歌^{うた}になると、先^{さき}の話^{はなし}の調^{ちようし}子^しでいふと、或^{ある}は趣^{しゆこう}向^{かう}をもつていつた歌^{うた}だとおもふ方^{かた}があるかも知^しれません。「日^ひはくれぬとおもふは」などいふところがよくのみこめなければ、さういふふうな感^{かん}じがしそうです。けれどもこの作^{さく}者^{しや}の中^{ちゆうしん}心^{しん}として詠^よんでゐるのは、そんなところでなく、何^{なに}事^{ごと}もないごく退^{たい}くつな生^{せい}活^{かつ}をしてゐる人^{ひと}が、けふもまた暮^くれて、蝸^{ひぐらし}が鳴^ないてゐるとかう思^{おも}つてゐて、暫^{しばら}く經^たつて後^{のち}よく／＼見^みると、それはほんとの、日^ひが暮^くれたのでなかつたといふことを、説^{せつ}明^{めい}でいつてゐるのでなく、氣^き持^もちから讀^よむ人^{ひと}の心^{こころ}に觸^ふれて行^いつてゐるのでありま

す。

あなた方がこの歌から受ける感じは、確かにさうした方面が
 おも主なのだと考へて貰はねばなりません。とおもふはなどいふ調
 子は、いかにも日を暮しかねてゐる退くつな人のあくびでもし
 たいような氣持ちが出てゐるとおもひます。

今の人は、秋だつて春だつて、さう變つた心持ちを持ちませ
 ん。それがほんとうはよろしいので、あなた方が特別に、秋は
 悲しいものだといふふうに感じてゐてはいけないのです。しかし
 ながら昔の歌人は、秋は悲しいものだと感じることの出来るのは、
 自分の歌人としての大事の資格だとおもつてゐました。秋のさび
 しき悲しさのわからぬものは、文學者でないと恥ぢてゐたので

す。それはかういふ歌うたがいくつも積み重なつた結果けつか、秋あきは悲かなしい
 ものだといふ約やくそく束でが出来てしまつたのです。だがさういふ不ふ自じ
 由ゆうな約やくそく束での出来ない前まへの歌うたを見ると、譬たとひ秋あきの悲かなしくさびしい
 ものだと詠よんでゐても、それが各個人かくこじんの實じつ際さいの感かんじとして人ひと
 々〃の胸むねに強つよく觸ふれるのであります。強き制ようせいせられて爲しかた方たなし
 やつてゐるのと、自みづから進すすんでやつてゐるのと違ちがふわけであります。
 いつも、秋あきになるといふと、心こころをめちやくちやにする、その
 秋あきはまたやつて來きたとおもふ。木立こだちの間あひだから、漏もれてさし
 て來くる月つきの光かげが、色いろが變かはつて感かんじられる。それを見みると、あゝ
 また寂さびしい秋あきだ、とかうおもふといふ歌うたです。
 あなた方がたの若わかい心こころには、かういふ歌うたの興き味ようみはわからないかも

知れませんが、日本にっぽんの文學ぶんがくには、かういつた靜しづかなかなかすかな
 味あじひが、よい作物さくぶつにはずつとほつてゐます。それを物ものを單たんじ
 純じゆんに考かんへる人ひとは、悲觀ひかん的てきだ 涙なみだ 脆もろい氣持きもちだといつて、い
 けないものとしてゐるが、人にんげん間はいつもにこく笑わらつてゐるも
 のばかりのものではありません。さびしく或あるは悲かなしい氣持きもちにな
 つた時ときに、はじめてほんとうの自分じぶんといふものを考かんへて見みるもの
 です。だからかういふ歌うたも、強あなちに排はい斥せきすることは出で來きません。
 もちろんかういふ歌うたをまねたものが多おほいからといつて、日本にっぽんの
 文學ぶんがくは悲觀ひかん的てきな文學ぶんがくだなど、よくも道理どおりを知らしないで、
 一いち概がいにばかにしてかゝるのはいけなくい癪せだとおもひます。外がい
 國くの譬たとへにも、金持かねもちが天國てんごくへ行ゆくのは、大おほきな象ぞうに針はりの穴あな

をとほらせるよりもむつかしいといつてゐますが、さういつた満
 足んぞくしきつた氣持きもちばかりでゐては、人間にんげんにはしみ／＼と、
 自分じぶんを省かへりみる時ときが來こないのであります。

一五、歌うたの見方みかた

今いま一つ、古今集こきんしゅうの名高なだかい歌うたをあげて、評判ひょうばんと實際じつさいと
 はこれ程違ほどちがふといふことを證しょうめい明みして見みたいとおもひます。

勅撰集ちよくせんしゅう第一番だいいちばんの古今集こきんしゅうの春はるのはじめにあるものとい
 へば、そのうちでも第一番だいいちばんの歌うたといふことになるから、自然しぜん人ひと
 は、それを重おもく見みます。在原ありはら元方のもとかたといふ人ひとの歌うたで、『舊年ふるとし

に春立ちける日よめる』といふ題で、

年のうちに、春は來にけり。一年を、こぞとやいはむ。今年とやいはむ

この歌、偶然よいものゝように考へられてゐます。ところが明治になつて、古い歴史のある日本の短歌を改正して、新派和歌といふものを唱へ出した一人の正岡子規といふ人は第一にこの歌を笑ひました。こんな歌がよいのならば、またかういふふうに詠んでも歌だといふことが出来るといつて、

日本人と、西洋人とのあひの子を、日本人とやいはむ。西洋人とやいはむ

といふのでした。

これは子規しきが、説明せつめいのわかり易やすいように作つくつて見みたゞけで、固もとより譬たとへにすぎません。子規しきのは三十一さんじゅういちじ字じのたゞの文ぶん、

章うたで、歌うたではありません。いくらまづくともつまらなくとも、

『年としのうちほうに』の方ほうには、多た少しょう意味い以外いがいに安やすらかな、そして子

どもらしい氣持きもちになつて起おこした氣分きぶんがでてゐます。その點てんはも

ちろん考かんがへねばなりません、さうかといつて、この歌うたがよい歌うた

だとおもふのは、たいへんいけないことです。

ふる年としといふのは、新しん年ねんに對たいする舊きゅう年ねんであつて、昔むかしの曆こよみでは

年としの明あけないうちに、立りつ春しゅんの節せつといふ曆こよみの上うへの時期じきがやつて

來くることもあつたのです。普通ふつうの考かんがへでは、春はると正しょう月がつとが一

致つちするものとしてあります。これは、習しゅう慣かんから出でて來くる心こころ

持ちであります。ところが時とすると、暦の上にはさういつた行
 き違ひが出来て來ます。年の變らないうちにもう春が來たといふ
 氣持ちは、文學的ではないけれども、確かに文學の生活の
 上では、一種注意をひくことであります。それでこの歌が出
 來たのであります。

まだ、年の變らない舊年の間に、あゝ春がやつて來たこと
 だ。して見ると、この一年が二つに分れて、きのふまでを
 去年といはうか。今日から後を、今年といはうか。

それも理くつからはをかしいが、考へればなんでもないと
 に、わづかな興味を起したにすぎません。だからけつしてよい
 歌ではありませんが、子規のいふような、あひの子の歌見たよう

なものでありません。しかしながら、かういふ歌うたが後々のち々々、だ
んくはやつてきて、數かずへきれないほどたくさん、同種類どうしゆるいのも
のが出來できました。つまり一いつ種しゆとぼけた歌うたといはなければなりま
せん。

一六、西行法師さいぎようほうしと新古今集しんこきんしゆう

古今集こきんしゆうの後のち、たくさん勅撰集ちよくせんしゆうやらいろんな歌人かじんのめい
くの家集かしゆうといふものが出てゐるが、歌うたのほんとうの性質せいしつと
いふものは、だいたい、古今集こきんしゆうの讀み人よびとし知らずの歌うたすなはち先さき
に解かい釋しやくしたようなものにあるといふふうかんがに考だへ出だされました。

古今集の歌は、全體としてはいけなない歌がありますが、短歌はどんなものかと考へると、古今集の歌がまづ頭に浮ぶのであります。その後二百年あまりの間に、だん／＼歌といふものゝ、かういふものでなければならぬといふ、漠然とした氣分が出来て來ました。さうして皆さんも知つてゐる鎌倉時代に近くなると、京都の貴族たちの歌が、目に立つて變つて來ました。それは、新古今集といふ歌集を見ればよくわかることです。後鳥羽上皇は、非常に御熱心でもあり、ごく稀なほどの名人でもいらつしやいました。いはゆる目の寄るところに玉で、この新古今集の時ほど、日本の歌の歴史の上で、名人・上手といふべき人が、たくさん揃つて出たことはありません。

唯^{たみな}皆^なあまり仲間^なづきあひが盛^{さか}んに行^{おこな}はれたゝめに、歌^{うた}は、お互^{たが}ひ
 によい影^{えいきよう}響^きばかりでなく、わるい流^{りゆうこう}行^{おこ}を起^{おこ}すことになり
 ました。文^{ぶん}學^{がく}の上^{うへ}によい人^{ひと}がたくさん出^でたから、かならずしも
 よい文^{ぶん}學^{がく}が出^で來るといふわけのものではないといふ事實^{じじつ}を、こ
 の時^{とき}ほど、はつきりと見^みせたことはありません。つまり上^{じようず}手^ずど
 うしが、皆^{みな}肝^{かん}腎^{じん}の點^{てん}よりもごく枝葉^{えだは}にわたるところに苦勞^{くろう}をし
 て、それをお互^{たが}ひに誇^{ほこ}りあつたゝめに、それが重^{かさ}なりくゝして、
 いけないことが起^{おこ}つて來^きました。それでも中^{なか}には、よいものがず
 いぶん出^で來^きてゐます。なんといつてもすぐれた人^{ひと}の作^{つく}つた文^{ぶん}學^{がく}
 にはよいものが出^でないではゐないわけなのです。

檣^{あふちき}咲^そく外面^{そとも}の木^こかけ 露^{つゆ}おちて、さみだれ霽^はるゝ風^{かぜ}わたる

なり（前大納言忠良）

檮あふちは、普通ふつう『せんだん』といつてゐる木きで、紫むらさきが、つた花はなが夏な
 頃つごろに咲さきます。それが家いへの外そと側の木き立ちだの中になか、交まじつてゐる
 わけであります。それを作者さくしやがさみだれの頃ころに見みてゐる歌うたで、
 檮あふちの咲さいてゐる家いへの外そと側の木き立ちだの下した蔭かげに、ほたくと
 露つゆが落おちる程ほどに、風かぜが吹ふきとほる。それは、幾いく日にちか降ふり續つゞ
 いてをつた梅雨ばいうが上ある風かぜである、といふ意味いみです。

かういつたところで、味あぢはひは、あなた方がたがめいゝくに、幾いく度ども
 くり返かへし讀よんで見みなければ起おこつて來こないとおもひます。

この頃ころの先せん輩ばいに、名な高たかい西さい行ぎ法ほう師しといふ人ひとが有あります。
 御存ごぞんじのとほり、世捨よすて人ひととして一いつ風ふう變かはつた、靜しづかな、さびし

うた
い歌を作つたといはれてゐます。そしてこの人の歌が、ひと うた新古
ゆう今集の歌の風ふうに、ひじよう非常な影えいきよう響あたを與へたとも見みられてゐま
 す。だがこの人の歌ひと うた全體ぜんたいに、かならずしも世間せけんでいふようなも
 のばかりでなく、やはり當時とうじ流りゆう行こうの、はでなこせくしたも
 のもないではありません。だがこの人のものひとでいゝのになると、
 かういふものがあります。

よしのやま吉野山。さくらちえだ櫻の枝ゆきちに雪散りて、はな花おそげなる年としにもあるか
 な

くも雲かゝるとほやまばたの、あき秋されば、おもひやるだにかな
 しきものを

よしのやま吉野山は、ふる古くからずいぶん長ながく、ぼう坊さんその外ほかしゆどうしや修道者と

いつて佛ぶつ教きょうの修しゆ行ぎやうをする人が籠ひとこもつてゐたことは、明あきらかな事實じじつでした。その經けい驗げんから、はじめの歌うたが出來たのでありま
す。

吉野山よしのやまよ。その吉野山よしのやまの櫻さくらの木きの枝えだに、見みてゐると、雪ゆき
がちらく降ふりかゝつてゐて、これでは、花はながいつ咲さきさう
にも思おもはれない。今年ことしは、花はなの咲さくことの晚おそくおもはれる年とし
よ、といふのです。

さびしい修しゆ道どう者しゃの仲なか間まの尠すくない山家やまがの暮くらしのうちにも、何なにか待ま
ち設まうける心こころがあつて、たのしみになつてゐるものです。もう春はるに
なつてゐながら、せめて樂たのしみにしてゐるその花はなさへも、とても
咲さきそうに見みえない。さういふ靜しづかな人ひとの物もの足たりない心こころ持もちを、

さびしいとも悲かなしいともいはないで、それかといつて、雪ゆきのふりかゝつてゐるのを怨うらむでもなく、自然しぜんの景色けしきをそのまゝに眺ながめてゐる氣き持もちがよく出でてゐます。わりあひいゝ歌うたの多い西さい行ぎようにも、これほどの歌うたは、さうたくさんにはありません。後あとの方は、これに比くらべるといくらか露ろ骨こつに、西さい行ぎようの氣き持もちを出だしすぎてゐるが、こゝまでつつこんで歌うたつた人ひとがないものですから、一いち例れいとしてあげました。

雲くもかゝる遠とほ山やまはたといふのは、雲くものかゝつてゐる景色けしきが、見みえてゐるのではありますまい。恐おそらく西さい行ぎようの知しつた人ひとが、西さい行ぎようと同じおなように、遠とほ山やまにかすかな修しゆ道どうの生せい活かをしてゐる。それが、秋あきになつて來きた時じ分ぶんに思おもひ出だされ

る。その遠とほ山やまばた——このはたは、山やまの傍そばといふことにな
く、やはり、山やまの畠はたけでせう——その秋あきの雲くもが、絶たえずかゝつ
てゐるはずの、遠とほ山やま家の畠はたけのあるところが、秋あきが來るとい
ふと、たゞ想そう像ぞうして考かんへて見みるだけでも、その生せい活かつが悲かな
しく、胸むねに感かんじられる。まして、このさびしい秋あきを、山やま畠ばた
のあたりに住すんでゐる人ひとは、どんなに悲かなしからうといつたも
のらしいのです。

この歌うたの特とく徴ちゆうは、想そう像ぞうしてゐる景けい色しきが、實じつ際さいにありく
と目めに浮うかんで來くるようになつてゐるところにあります。これを文ぶ
學がくの上うへで把は持じ力りきといつて、自じ分ぶんの經けい験けんをいつまでも忘わすれず
に、握にぎりしめる力ちからがあつて、機き會かいがあると、それを文ぶん章しように現あらは

す能^{のうりよく}力をいふのであります。一句・二句の景色は、西行^{さいぎよう}にその強い力^{つよちから}のあることが窺^{うかが}はれます。それによつて、その以下^{いか}の思^{おも}ひやるだに悲^{かな}しきものをといふような、むしろありふれた言^{こと}葉^{とば}まで、いきくと人の胸^{ひとむね}に、なんだか堪^{たま}らないように迫^{せま}つて來^くるのであります。

一七、ほんとうに優美^{ゆうび}な歌^{うた}

おなじ新古今集^{しんこきんしゅう}に、藤原良經^{ふじはらよしつね}といふ人^{ひと}があつて、攝政^{せつしよ}太政大臣^{うだじようだいじん}にまでなつた人^{ひと}ですが、よほどの歌^{うた}よみでありました。

うちしめり、あやめぞかをる。ほとゝぎす鳴くやさつきの

雨の夕ぐれ

この歌などは、そんなにたくさん類例のないほどよいもの
 あります。ものゝ感じ方が非常に鋭敏で、鼻・耳・肌などに觸
 れるものを鋭く受け取ることの出来た珍しい文學者であつたこ
 とを見せてゐます。

五月の雨の降つてゐる夕ぐれのことです。どこからともなく、
 あやめの咲いた花のかをりがして來ます。それが、かをりが
 するといふ程でなく、なんとなく感じられるといふ程度に匂
 つて來るのです。それを雨のために、匂ひが和らげられて、
 ほとんど、あるかないかのようになり、しみりとしたふうにかを

つて来る、と述べてゐます。

説明したゞけではなんでもないことですが、この時代に、これほど細かく捉へがたいことを現した人はないのです。

『ほとゝぎす鳴くやさつき』といふのは、何もその時ほとゝぎすが鳴いてゐるのではありません。さつきといふために、習慣的にほとゝぎすが鳴くところのといふ言葉が附いて來たのであります。いはゞ一種の枕詞で、かういふ風に靜かな歌では、少しでもいひすぎたり内容が殖えすぎると、全體の調和が破れて來ます。むしろ、内容のないものを入れなければならぬのです。それでかういふ言葉が利用せられてゐるのです。けれどもどうしてもほとゝぎす鳴くやといふと、ほとゝぎすが鳴いて

る實際じつさいの様子ようすが浮うかびます。これがこの歌うたの少すこしの瑕きずであります。

この歌うたを作りつくかへて、別べつに變かはつた領りよう分ぶんを開ひらいたものがあります。それは明治めいじになつて死しんだ京きやう都との蓮れん月げつといふ尼あまの作さくで、朝あさ風かぜにうばらかをりて、ほとゝぎす鳴なくや うづきの志し賀がの山やま越まえ

これになると、ほとゝぎすは、實際じつさいに鳴ないてゐるように詠よんでゐます。けつして枕まくら詞ことばでなく、四しが月がつを意い味みするうづきの、自然しぜんの景けし色きの一いち部ぶとしてゐます。が、こゝを中ちゆう心しんとして見みると、どうしても良よし經つねの歌うたから、暗あん示じを得えて作つくつたに違ちがひありません。そして良よし經つねの歌うたの氣き分ぶんをすつかり取とつて、一いつ種しゆの歌うたに

纏めてゐます。更に今少し、さっぱりとした感じが出てゐるよ
うです。

四月頃には、野茨の花が咲くものです。この匂ひがまた非
常によろしい。風などにつれて匂つて來ると、なんだか新鮮
な氣のするものです。志賀の山越えといふのは、昔から歌にたび
々詠まれた、京都から近江へ越えるところです。

この歌は恐らく空想でせうが、この場所或はさうした景色は、
蓮月が始終見てゐたに違ひありません。だから空想であつ
ても事實と同じであり、むしろ事實より力強く人の心に響く
のです。野茨の匂ひがして來て、自分の行く道の傍に、ほとゝぎ
すの鳴く聲のするところの志賀の山越えよ、といふのです。かう

いふ風な作りかへが、また短歌の上にならびたび行はれました。けれども、わざ／＼作りかへようといふ考へを持つた時には、たいして失敗して、元の歌から獨立したねうちの無い、文學的にはだめなものが多いのであります。蓮月尼の歌などは、作る時には恐らくうちしめりの歌のあることも忘れてゐながら、どこかに記憶が残つてゐて、その調子、その氣分が、現れて來たものでありませう。

一八、調子の立つた歌

後鳥羽上皇のお歌は、その現し方が非常に手がこんでゐて、

ちようど腕うでのよく利きいた人ひとの作つくつた、工藝品こうげいひんを見るみるようであり
 ますから、あなた方がたに、そのおもしろみを感じかんじて貰もらふのは、むつ
 かしいと思おもひます。こゝにはごく平凡へいぼんなものをあげておきませ
 う。

秋あきふけぬ。鳴なけや。霜夜しもよのきり／＼す やゝかげさむし。
 蓬原よもぎふの月つき

秋あきが深ふかくなつてしまつた。この霜空しもぞらの晚ばんに鳴ないてゐる、聲こゑ
 かれ／＼のきり／＼すよ。もつと出來できるだけ鳴なけ。空そらか
 ら照てらす光ひかりも、冷つめたく感かんじられる。その蓬原よもぎばらのようになつた家いへを
 照てらす月つきよ。その下したで、きり／＼すが、ほのかに鳴ないてゐる。
 きり／＼すといふのは、こほろぎだといつてゐます。

かういふ風にくろうとらしい歌をお作りになつたので、歴代
 の皇族方の中では、文學の才能から申して、第一流に
 お据りになる方です。けれども、時代が先に申したようですから、
 そのお作も、自然おもしろさが片よつてゐて、完全なものとは
 申し上げることが出来ません。

天皇さまをはじめ、皇族方のうちで、圓滿な歌を作られ
 たお方を探して見ると、それから時代が下つて、南北朝のは
 じめ頃の伏見天皇、それからその皇、后さまの永福門院
 といふお方、このお二方が、まづとびぬけていらつしやると思
 ひます。勅撰集でいふと、新古今集が八番めの歌
 集、それから後六つめすなはち、古今集から勘定して

じゆうよばん
 十四番めの 玉葉和歌集、 じゆうしちばん
 の二つのものに、 特別に關係がお深いのであります。

一九、 發達しきつた歌

ゆふぐれの雲飛びみだれ、 荒れて吹く 嵐のうちに、 時雨
 をぞきく

いつはとも 心に時はわかなくに、 をちの柳の 春になる
 色

これが伏見天皇のお歌です。 後鳥羽上皇 から、 も一つ進ん
 で、 更にその一種の癖を抜いた素直なお歌になつてゐます。

ゆふがた 夕方そらの空には、一ぱい雲くもが亂みだれてゐて、あちらこちらに早はや
 く飛び廻まはつてゐる時ときに吹きおろす山風やまかぜが、あら／＼しく吹ふ
 いてゐる。その目めにも耳みみにも、すさまじい景色けしき。殊ことにはげし
 い風かぜの音おとにも打ち消けされずに、静しづかな時雨しぐれの音おとのしてゐるの
 を自分じぶんが聞きいてゐる。

これはちよつと見みると、「雲飛くもび亂みだれ」、「荒あれて吹ふく」など
 いふ言葉ことばが、ごたく／＼してゐるようであるが、私わたしの解かい釋しやくした
 ように荒あれて吹ふくから、別べつに考かんへて見みると、空模そらもよう様に更さらに加くは
 て、はげしい風かぜの様よう子すが感かんじられます。このお歌うたは静しづかな時雨しぐれの
 音おとを、さうした間あひだに耳みみを留とめてゐたといふところに、變かはつた興きよう
 味みを起おこされたので、かういふ詠よみ方かたの歌うたは、これ以前いぜんにもこれ

以後いごにも、まづ類例るいれいのない新しいあたらしい、さうしていゝものだといふことが出来できます。あらしといふのは山やまおろしのことで、暴風ぼうふうではありませぬ。

今は、冬ふゆか春はるか心こころの上うへで迷まよはずにゐられない時じぶん分ぶんである。心こころではいつとも時じこう候こうの區別くべつがつかないのに、目めに見みるものは、すでに尠すくなくとも、一つだけは春はるらしいし示しめしてゐる。これは遠方えんぽうに立たつてゐる柳やなぎの木きの、いかにも春景色はるげしきになつて行く色いろあひがそれである。

春はるになる色いろといふのは、まだ春はるになり切きつてゐるわけではありませぬ。春はるの様子ようすが調とつて行いつてゐることをいふのです。

色いろといはれたのは、漠然ぼくぜんとどこか春はるらしい様子ようす・色いろあひの見み

えることを、きぶんしき 氣分式に示されたのです。をちの柳やなぎといふのも、
 はつきりと、なんぼん 何本あるとも、どの位くらゐの距離きよりにあるともいはれな
 いで、まづほのかな色いろあひで、幾いくほん本ほんか竝ならんであるといふ感じを
おこ起させるためなのです。いつはといふのは、いつといふのとかは
 りがないと見みておいてよろしい。

やまもとの鳥とりの聲こゑより明あけ初そめて、花はなもむらく、色いろぞ見み
 え行くゆ

なに 何となき草くさの花はな咲く野のべの春はる。雲くもに ひばりの聲こゑものどけ
 き

これが永えい福ふく門もん院いんのお歌うたです。御覽ごらんのとほり、物ものの色いろあひ、
あは組み合せが、非ひ常じょうに美うつくしく作つくられてゐます。

やまふもとほう 山の麓の方に、鳥の聲がする。その鳥の聲のするあたりから、
 だんく夜が明けかけて、あちらに一かたまり、こちらに一
 かたまりといふふうに、山の櫻の花も色が現れて、だんく
 明らかになつて行く。

『花もむらく色ぞ見え行く』などいふところに氣のついたのは、
 やはり時代がずつと新しくなり、人の心が自然物に對して、敏び
 感に動くようになつて來たからです。しかし普通の人は、文ぶん
 學の上ではやはり昔のまゝの型どほりに作つてあるに拘らず、
 勝れた人は、その時代の人らしい眼で、物を見、感じるものであ
 ります。さうして新しいとはいひながら、柔らかで穩やかなよい
 氣持ちを破らないで、上品さを持ちながら歌はれてあるのが、

この歌うたなどのよいところことです。殊ことに二番にばんめの歌うたなどになると、ほとんど、只ただ今いまの人ひとが作つくつたものか、とうっかり思おもはれるようなお作さくであります。まづ普通ふつうの人ひとならば、名なのない雑ざつ草そうの花はななどは詠よみません。ところがこの門院もんいん様さまは、その雑ざつ草そうの花はなに興きよう味みを持つてゐられます。なんとといふことのない變かはつた點てんもない草くさの花はな、この咲さいてゐる野のの春景はるげしき色いろ、とぱつと廣ひろい様子やうすを現あらはして來きて、下しもの句くで、自分じぶんはどこにをなつて、何なにをしてゐるかといふことを、はつきりと現あらはしてあります。その草くさの花はなの咲さいてゐるところに据すわりこんで空そらを仰あふぐと、雲くもが出てゐる。その雲くものあたりへ鳴なき上あがつて行ゆく雲雀ひばりの聲こゑに氣きがついて、そして、今いまかうしてゐることの外ほかに、なんの爲しごと事ことも煩わづらはしさも心こゝろがかりもない、豊ゆたかな氣き

持ちを感じてゐることを、のどけきといふ言葉で示されてゐます。
 この頃にも、このお二方を取りまいて、名人といつてよい
 人々が大ぶんゐるのですが、そのお話しは、只今いたしませ
 ん。こんな勝れた歌が、しかも非常に貴い方々のお作に出
 て來てゐるに拘らず、世間の流行は、爲方のないもので、だ
 んく、悪い方へくと傾きました。さうして、この玉葉
 集、風雅集などの歌は、いけないつまらない歌だ、とねうち
 をきめてしまふようになりました。これは世間の評判と、ほ
 んとうの物のねうちとは、たいていの場合一致してゐないそのも
 つとも適當な例であります。これから後、室町時代から時が
 過ぎて江戸の時代に至るまで、そんなに勝れた歌人は、多くは出

てまゐりませんでした。つまり平凡へいぼんなお手本てほんを敷しき寫うつしになぞつて行くゆくものですから、だん／＼つまらなく、その作者さくしやの特とくち徴ちゆうを出すだことが出来できなくなつたわけであります。

二〇、江戸時代えどじだいの歌うた

ところが江戸時代えどじだいになると、徳川氏とくがはしの政治せいじの方針ほうしんがさうであり、また世よの中なかが治をさつて來きたゝめか、學問がくもんが盛さかんになつて來きました。そして支那しなの學問がくもんから更さらに進すすんで、日本にっぽんの學問がくもん日に本ほんの文學ぶんがくの研けん究きゆうが行おこなはれ出だして來きました。さうして學がく者しも文學ぶんがく者しやも、かならずしも上流社會じようりうしやかいの人々ひと／＼ばかり

でなく、かへつて低い位置の人の方に中、心が移つて來るようになりしました。

昔の文學昔の短歌を研究した結果、今までやつてゐたのはいけなかつた。五百年も千年も前の歌の方が、自分たちのものより遙かに新しく、もつとく熱情が籠つてゐるといふことに、皆が心づくようになりしました。さういふよい影響を與へたのは、第一に、萬葉集が新しく讀み返されたことであります。それから學者・文學者の間に、一足飛びに、よい歌に激戟せられて、新しい歌を作る人々、が殖えて來ました。

さういふ人たちは、數へ上げることの出來ない程たくさんあり

ますから、こゝにはごくわづかの代表者^{だいひようしや}だけを出して^だおきませう。

二一、歌人^{かじん}としての國學者^{こくがくしや}たち

よくいふ國學^{こくがく}の四大人^{しうし}のうちで、一番^{いちばん}文學者^{ぶんがくしや}らしくつたのは賀茂真淵^{かものみぶち}であります。そしてそれ以前^{いぜん}にも、だんく^{まんによ}萬葉^{まん}ぶりの歌^{うた}を作^{つく}つた人^{ひと}があるが、この人^{ひと}から一つ^{ひと}の主義^{しゆぎ}として、さういふ方面^{ほうめん}に進^{すす}む歌^{うた}が出來^{でき}て來^きました。でもこの人^{ひと}の歌^{うた}は、評^{ひようばん}判^{はん}ほども勝^{すぐ}れたものではありませぬ。だから一首^{いつしゆ}だけ引^ひいて置^おきませう。

秋あきの夜よの ほがらくと、天あまの原照はらてる月つきかげに、雁鳴かりなき渡わたる

ほがらくといふと、夜明よあけの空そらのあかるさを示しめす言葉ことばです。それを、月つきの照てつてゐる空そらの形けい容ように用もちひたので、いかにも晝ひるのような明あかるい天てんが感かんじられます。隅すみから隅すみまでからりと明あかるく、廣ひろい空そらに照てつてゐる秋あきの夜よの光こう線せんのさしてゐる中うちに、雁かりが鳴なき渡わたつて行ゆくといふ歌うたです。

感かんじてゐるところはよろしいが、上うへの三句さんくがごたくとして、感かんじた氣分きぶんがすつきりと現あらはれてゐません。けれどもこの人ひとは、まづ大體だいたいかういふ調子ちようしに、一筋ひとすぢに歌うたふのが得意とくいだつたと見みえます。

おなじような歌を並べて見ませう。上田秋成といふ人は、眞淵の孫弟子に當る文學者ですが、この人も、歌はその散文ほど上手ではありませんが、かなり作れた人であります。

照る月に、雁のまれびと鳴き渡る。わが待つ友は、こよひ來なくに

こんな歌になると、この人の方が、遙かに勝れた才能を持つてゐたことがわかります。

空に照つてゐる秋の夜の月。その月光のさしてゐる空を遠方からやつて來た雁が、列をなして鳴きとほつて行く。こんな晩には、一しよに親しむ友だちの訪問が待たれる。けれども私の待つてゐる仲間、今晚はやつて來ないでゐる

のに、さうして私一人わたひとりで明るくあかほがらかな天地てんちに照るて月に對つきたいしてゐるのに、その上うへを雁かりが鳴き連つなつてとほる、といつた満ま足んぞくはしてゐながら、ある點てんに、自分じぶんの感じかんをいつて聞かせきたい仲間なかまのゐない、もの足らなさを述のべてゐるのです。

しかしそれも、けつして理りくつらしくは出でてをらずに、このほがらかな調子ちようしに、玉たまのように包つまれて、たゞ月の光つきひかりに、及び雁かりの列れつに動うごかされた氣分きぶんとして、胸むねに觸ふれて來きます。かういふのが、ほがらかな、たけ高い調子ちようしといふのであります。先さきの歌うたに比くらべて見みると、こんな形かたちの歌うたの出でるまでは、それでも相そう當とうに見みえたものが、なんだかつまらなく感かんじられるでせう。

まれびとといふのは、お客きやくさまといふことですが、ごくたまに

くめづら 来る珍しい人といふのが古い意味です。渡り鳥なる雁をば、この
 ちんきやく 珍客に見立てたのであります。それを譬へのようにいはない
 ちよくせつ で、直接にまれびとなる雁といふふうにいつたところに、濁
 りがなくなつてをります。

二二、加納諸平

まぶち 眞淵の弟子の本居宣長、その弟子の夏目麿、この人の
 こ 子で、紀州の醫者の家の養子となつた加納諸平といふ人があ
 ります。小さな時から父の伴をして、諸國を歩いて攝津の國へ
 きとき 来た時に、酒飲みの父親は、月を捕へるのだといつて、歌の友

だちなどが止めるのもきかずに、池の中へをどり込んで死にました。それからすぐに和歌山へ引き取られて行つて、久しく國へ歸ることもしませんでした。加納家に住みこんでから、はじめで遠とほたふみほたふみ江はの母のところへ歸省したことがあります。かういふ傳記のいちぶ一部を知つて諸平の歌を讀むと、誠に思ひ深いところが感かんじられます。

歌や俳句の上では、その形が短く小さいだけに、はしがき——また、詞書ことばがきともいふ——や、その歌を作つた事情などを知るといふことが、外の文學とは別で大事なことであります。つまりその作物の背景になつてゐるものをのみこんで、眞に歌なり俳句なりを味あぢはひ知るといふことが、どうしても必要なので

す。

旅たび衣ころもわゝくばかりに 春はるたけて、うばらが花はなぞ、香か

匂におふなる

青年せいねんが一人旅ひとりたびをしてゐるといふことを、頭あたまに持もつて下ください。

わゝくといふのは、きれや着物きもののぼやくになつて來くること、
長旅ながたびをしたゝめに、摺すり切きれて來きたりしたところがある様子ようすで
す。

着きてゐる旅行りょこうの着物きものが、わゝけるほどに早はやく出でた春はるの旅たびも、
すでに春はる深ふかくなつて、道みち傍ばたに雜草ざつそうのように咲さいてゐる
野茨のぼらの花はなが、匂におひ立たつて感かんぜられる、といふ意味いみです。

がそれはもちろん、實じつ際さい以い上じょうに歌うたらしい味あぢをつけようとして

ります。理くつつぽくいへば、和歌山を出て遠江までの間に、
 旅ごろもがわけるといふ程のこともあるまいし、また早春
 に出たのが晩春になつたといふ程のこともありますまい。け
 れどもそれほどのことは、文學上の一種の誇張といふも
 ので、いくらか輪をかけて感じ深くいひ表すのが、文學のほん
 とうの爲方だと、今ですらも考へてゐる學者・文學者が多い
 のですから、これくらゐのことは、昔の歌としてあたりまへだと
 見ていゝとおもひます。この頃の人はすべて、あまり自分の生
 活が歌に現れるといふことを嫌つたので、さういふふうなのを
 無風流だとしりぞけてゐました。この中にこんなのが出て來
 と、さすがにちよつと、胸をうたれる氣がするのです。

ゆふ月夜づくよ ほの見え初めそしあぢさゐの、花はなも まどかに咲さ
 きみちにけり

これはちよつと見ると、いかにも紫陽花あぢさゐの花はなの様子ようすを細やかに
 寫うつしてあるように見えますが、實じつは紫陽花あぢさゐを見て作つくつたのでなく、
 見慣みなれてある花はなの模様もようを空想くうそうに浮うかべて、美うつくしく爲した立てたに過すぎ
 ません。だから近頃ちかごろの歌うたや文學ぶんがくの上うへからは、かういふ態度たいどは
 よいとはいへないが、それにしても作つくつたものが相そう當とうによけれ
 ば、やはりよいといふより外ほかはありません。空想くうそうで作つくりながら
 これまでに作つくり上げたあのだから、その作さく者しやに力ちからの十じゅう分ぶんあつ
 たことがわかります。この人ひとは學がく者しやであり文學ぶんがく者しやですから、
 言葉ことばのあやを十じゅう分ぶんに心こゝろ得えて、少すこしのむだもしないでゐます。

それがかへって、今では邪魔になるのです。譬へばわれ／＼の時
 代には、夕づく夜ならば、ほんとうに夕方のお月さまが出てゐ
 ると感じるだけで満足するのには、この人の歌では、昔の習
 慣に従つて、ほの見え初めしの枕詞なる夕づく夜といふ言
 とば葉を、まづ据ゑたのです。もちろんたゞの枕詞だけでなく、
 夕月の頃にほんのり見えかけたといふ意味にはいつてゐるので
 すが、學問的にもこの二つの句の連絡をつけてゐるわけなの
 です。昔はかういふことの自由に出来るのが名人だと思はれた
 のですが、今ではかへって、文學を味ふ上の足手纏ひとして、
 避けねばならぬことであります。夕月夜といふのは夕月の夜
 といふことでなく、月夜は月のことです。で、夕月の頃といふ

と、新月しんげつの出た時分じぶんといふことになりす。

その頃ころにはまだ、ほんのり見えかけてゐた紫陽花あぢさゐのその花はなも、

もう今いまでは、まどかにまんまるく、圓えんまん満まんに咲さいてゐることだ。

紫陽花あぢさゐの花はなのだんく咲さき調とつて行くありさまが、よく詠よんで

あります。その上うへに、いかにも紫陽花あぢさゐに適てきした氣分きぶんがで出てゐます。

たゞそれだけで満まん足ぞくせず、新月しんげつの頃ころから注ちゆう意ういしてゐたの

が、こんなおほに大りきく立派りつぱに咲さいたといふようなおもしろみを附つけ

たのは、ほんとうはよくないのです。けれどもそれはあなた方がたの

年頃としごろでは、細こまかに説といてもむりですから、もつと長ながく歌うたに親したし

んで貰もらつて、自分自身じぶんじしんの批ひ評ひやうがで出来るまでは、まづよい歌うただと

考かんへて置おいて下ください。その上うへこの歌うたでは、まだく言こと葉はの外そとにい

ひ含めたものがたくさんあります。

あぢさゐの花もとももの字を使つてゐるのは、空のお月様がちようどまんまるになつてゐる頃、あぢさゐもまんまるになつた。かういふことを感じさせようとしてゐるのです。なかなか昔の人は苦勞したものです。がそんなことは、文學の上ではむだ骨折りといふものです。それをまた、おもしろいと思つてゐてはいけないのです。

二三、思ひを抒べる歌

この人には歌の上に、まだいろくの試みがあつて、おもしろ

いことをしてゐるが、その一例いちれいをあげると、

月に吹く市の植うゑ木の風かぜ高たかみ 塵ちりも残のこらず 霽はれし空そらかな
月に聴きく波なみの響ひびきも更ふけにけり。誰たれか うきねの袖そで絞じぼるら

む

月にうつきつ大城おほきの鼓つづみしばし待まて。くだちゆく夜よを、誰たれか 惜を

しまぬ

かういふ一ひとつ續つづきの歌うたが、まだ／＼あるのですが、これだけにおして置おきます。

月の照つぎつてゐる所ところに咲さいてゐる、町まちのとほりに植うゑてある木きに、當あたるところの風かぜの音おとの高たかさに、なるほどひどい風かぜだと思おもつて空そらを見みると、吹ふき上あげられた塵ちりも、どこへ行いつたかわか

らぬほど澄みきつて、霽れきつてゐる月の空よ。

月光の照す下に聞えて來るその波の響きも、思へば夜の更けた感じのすることだ。かうした晩に、この海に舟旅をして、船の中で目の覺めてゐる人もあらう。そして水の上に浮いて寝てゐる袖を絞るほど、涙で濡らしてゐるだらう。

月の輝いてゐる空に響くお城の太鼓。それは、もう門限だといふ知らせなのです。だがまう暫く、打つのを待つてくれと感^{かん}じるのは、現^{げんざい}在^{ざい}の心持^{こころも}ちのなくなるのを惜^をしむ心な^{こころ}のです。それにも拘^からず、太鼓はどん／＼鳴^なつてゐます。それに對^{たい}して、なるほど夜はだん／＼更^ふけて行くが、この更^ふけて行く夜^よを惜^をしまない人^{ひと}が、誰^{たれ}一人^{ひとり}としてあらうか、とか

ういふ心持ちです。

全體月に何々といふふうに、頭に句を置いてゐるために、

幾分歌が上調子になつてゐるが、眞底にはやはりよいもの

があります。市といつても、今の市場ではなく、商人の店を

列ねてゐる町通りで、そこには、今の街路樹に似たものを植

ゑたのです。それは古いことで、この歌人のゐた時分のことでは

ないが、歌の上ではかういふふうに、現代を古いものに爲立て、

作ることもあつたのです。まああなた方にわかり易いためには、

東京の銀座その外、街路樹の植つてゐる商店街の、夜

ふけて騒いでゐた人も、寢静まつた後の月光を思ひ浮べて見れば

よからうと思ひます。

浮き寝といふのは、水鳥が、波の上で寝ることから移つて來
 て、人間にも、舟旅の夜泊りの場合に用ひます。それにも、
 うきねといふ言葉に憂きといふ厭な、情ない悲觀すべき意味の言
 葉が、音から感じられる習慣になつてゐます。この歌も内
 容よりは、調子が流れすぎてゐるのですが、作者が月の晩
 に、さびしい心になつて、外にもかうした人があるといふことに
 おもおよぼ思ひ及してゐる心持ちが、この人をなつかしく感じさせます。
 おほきつゞみ大城の鼓といふのは、和歌山城の『時』の太鼓です。
 この歌は別に深く思ひこんでゐるのでもない樂しみを、ぢつと
 續けてゐたといふだけの物ですから、調子と意味とがぴつたり
 としてゐます。さうしてこれらの歌は、皆歌つて氣持ちの好いよ

うに、調子が調つてゐます。

沖さけて 浮ぶ鳥船。時のまに翔りも行くか。いさな見

ゆらし

くまのやま 熊野の山めぐりをした時の歌ですが、沖遠く離れて浮んでゐる鳥のような船、それが今、そこにをつたかと思ふと、瞬間の目も及ばない遠いところにかけて行つてゐることよ。それは鯨が見えたに違ひない。

こんな歌になると、自由で浮れるような調子が、ぴつたりと

もりを衝く鯨船のすばやい動作を表すに適當してゐるでは

ありませんか。鳥船といふのは大昔の國語で、船の名前でもあり、同時に舟についていらつしやる神様のお名前でもありま

した。あなた方がたならば、船ふねが早いはやから鳥とりに見立みたてたのだと思おもつて置おいてさし支つかへありません。熊野くまのの鯨くぢらつきの歌うたです。

二四、香川景樹かがはかげき

この諸平もろひらのゐた時分じぶんに、近世きんせいでもつとも名高なだかい香川景樹かがはかげきといふ歌人かじんが京きやうと都とにゐました。非常ひじやうに上手じやうずの評判ひやうばんがあり、門人もんじんも多く、その一門いちもんは榮さかえて今いままでも續つゞいてゐるほどの人ひとでありました。明治めいじてんのう天皇てんのうのお師匠ししやうばんになつた人も、この流ながれのものであります。そのためためにたいへん名めい人じんのようように感かんじられられてゐますが、これもまた、評判ひやうばんと實際じつさいとの價値かちの違ちがふ生いき

た手本^{てほん}で、この人の歌^{ひと うた}にはほとんど文學^{ぶんがく}としてねうちのあるものは見^みえませんが。まづ一例^{いちれい}を取^とつて申^{まを}しませう。

春日野^{かすがの}に若菜^{わか菜}を摘^つめば、われながら昔^{むかし}の人のこゝちこそすれ

これはこの人のものでもいゝ部類^{ぶるい}の歌^{うた}です。けれども、先^{さき}の諸^も平^{らへ}に似^にた歌^{うた}があるのと竝^{なら}べて見^みませう。

曳馬野^{ひくまの}の木^この芽^めはり原^{はら}。入^いり亂^{みだ}れ、春日^{はるひ}くらすは、昔^{むかし}人^{ひと}かも

景樹^{かげき}のは、『歴史的^{れきしてき}にいろ／＼な記念^{きねん}のあるこの春日野^{かすがの}で、自分^{じぶん}が若菜^{わか菜}を摘^つんでみると、昔^{むかし}の人も、かうして若菜^{わか菜}を摘^つんでゐたのだから、うっかりすると、自分^{じぶん}でゐて昔^{むかし}の人のような氣^きがす

る』といふのです。おもしろいと思ふでせうが、これは説明で
 おもしろく見えてゐるので、歌その物は、たゞさういふおもしろ
 さを考へて見たゞけで、ほんとうに氣分の上^{うへ}にまで、昔の人にな
 つた心持^{こころも}ちが出てゐません。これを知識の上^{うへ}の遊びといひます。
 それと、もに、氣分が少しも伴はないのですから、散文的な歌
 といはねばなりません。殊^{こと}にわれながらといふのは、いかにも常
 識^{ようしきてき}的^{てき}で、自分で知つてゐて、わざとそんなことをいつたゞけ
 だといふことを見せてゐます。

それと比べて見ると、諸平^{もろひら}のはさすがにもつと熱情^{ねつじよう}が
 出^でてゐます。自分が昔^{じぶんむかし}の人^{ひと}か知らんとかう疑^{うたが}つてゐるので、その疑
 ひの起^{おこ}る導^{みちび}きとして、『曳馬野^{ひくまの}——萬葉集^{まんにようしゆう}などに見えてゐ

る土地で、濱松から北へかけての平野地方——の木の芽が新しく出てゐる。——そのはると、はりの木のはりとをひっかけて歌つたもの——はりの木原にめちやくちやに入りこんで、この春の日を一日遊んでゐるのは、あの萬葉集に出て來てゐる人たちなのか知らん』と疑つたので、その一人として、諸平自身も含めていつてゐるわけです。

景樹の歌の方が、皆にわかりやすからうと思ひますが、そこが散文と詩との違ふところで、意味の上からおもしろいことが、きつと詩や歌の完全なねうちをきめるものだといふわけにはいけないのです。世間のものを見ても、誰にもわかるものが、きつとよい文學藝術であると思つてゐる人もあるが、それは大

へんな間違ひまちがであるといはねばなりません。景樹かげきのことはこれでよします。

景樹かげきなどが騒さわがれてゐたかげに、評判ひようばんにならずにゐた人が、
 まだくありました。その一等目いつとうめにつく人は、越中富山の
 橘たちばなの曙あけみ 覽みであります。この人は明治以後の新派しんぱの和歌わかといふ
 ものに、非常ひじょうな影響えいきようを與あたへた人ひとですが、それまではあまり
 人ひとから騒さわがれなかつたのです。江戸えどの末すゑから明治めいじの始はじめにかけて
 生きてゐた人ひとです。いひ傳つたへでは、大へん貧乏びんぼうな暮くらしをしてゐ
 て、しかも國學こくがくや歌うたの樂たのしみを捨すてなかつた人ひとであります。こ
 の人ひとにも、諸平もろひら同様どうよう同じ句くをはじめに据すゑて詠よんだ歌うたがあり
 ます。

二五、橘曙覽
たちばなのあけみ

なか
中でも、『獨樂吟』といふのは、五十首からもあります。
なだか
名高いものだから、そのうち、六七首竝べておきませう。

たの
樂しみは、草くさのいほりの むしろ敷しき、ひとり 心こころをしづ
めときをる時

たの
樂しみは、すびつのもとにうちたふ仆れ、ゆすり起おこすも知らで
ねし時とき

たの
樂しみは、めづらしき書人ふみひとに借かり、はじめ一枚ひとひら ひろげ
たる時とき

たの 樂しみは、 妻めこ子むつまじくうち集つどひ、 頭かし竝ならべてものを食くふ
時とき

たの 樂しみは、 心こゝろに浮うかぶはかなごと 思おもひつゞけて、 たばこ吸す
ふ時とき

たの 樂しみは、 晝ひる寢ねめぎむる枕まくらべに、 ことくと湯ゆの沸にえてあ
る時とき

たの 樂しみは、 乏とほしきまゝに 人ひと集あつめ、 酒さけのめ ものを食くへと
いふ時とき

たの 樂しみは、 童わらわ墨ぼするかたはらに、 筆ふでの運はこびをおもひをる時とき
たの 樂しみは、 神かみのみ國くにの民たみとして、 神かみのをしへを深ふかくおもふ
時とき

かういふふうに、最後の句を皆『時』でをさめてあります。恐らく口から出任せに、大して苦勞なしに作ったとおもはれますが、それが皆下品でなく、あつさりとはがらかに明るい氣持ちで詠み上げられてゐます。この外、樂しみの歌はありますが、年の若いあなた方にはわかりにくいものは省きました。これらの歌ならば、あなた方にも大體わかりませう。そして年が行くと共に、これらの歌の味ひが、變つて感じられて來るのです。だからまづ暗記しておいてほしいとおもひます。

一 一番はじめの歌は、蓆を敷いて、そこに坐りこんで、ぢつとしてゐる心の寛ぎを喜んでゐるのです。

たばこの歌で、はかなごとゝいふのは、考へなくてもよいよう

なんなんでもない、軽いことゝいふことです。これはやはり、大人
 でないとわからない氣持ちです。第一あなた方にはたばこを吸
 ふ人の氣持ちがわかるはずがないのです。貧乏ながら、こせつ
 かずに暮らしてゐたことは乏しきまゝの歌を見て、いかにも人なつ
 かしい、善良なこの歌人の性質が思はれます。
 やはりあなた方にはわかり難い興味かも知れませんが、わら
 はすみするなどの歌は、ぢつくりと落ちついた、そしてなんとも
 いへない心のはづんでゐるのが感じられるものです。
 最後の歌は、よく世の中の人の作りそうな道徳的な歌ですが、
 この人は眞底から、さう考へてゐたゝめに、人から頼まれて作
 ったといふような浮いたところを見せてゐません。ことに、神の

をしへを深くおもふ時、などいふ味ひは、これから先、あなた方にだんだんわかつて来るだらうと思ひます。

この人は、また物の名前ばかり集めて、一首の歌を作つてゐます。

木樵り歌 鳥のさへづり 水の音 ぬれたる小草 雲かゝ

る松

山中といふ題です。山中目に見、耳に聞えるものを五

とほり並べて、そしてもの静かな山の様子を考へさせようとした

のです。けれどもこれは、和歌ではまづ出来ない相談で、恐ら

くこの人が、かういふふうな思想の表し方をする俳句にも、興

味を持つてゐたから出来たものなのでせう。どう考へても、こ

の五つの現象が、一つの完全な山のありさまに組み立て、
 感じられては來ません。こんな人ですから、時々、おどけた歌
 を作つて、人を笑はせようと思いました。そしてやはり、下品すぎ
 るといふ程でなく出來てゐるのは、人格によるのです。

着る物の縫ひめくくに、子をひりて、風の神代はじまりに
 けり

わたいりの縫ひめに頭さし入れて、ちゞむ虱よ。わがおも
 ふどち

やをら出で、ころもの首を這ひ歩き、我に恥ぢ見する虱
 どもかな

昔の人は、虱となじみが深かつたゝめに、なんでもなく、かう

いふ歌を作つてゐます。そして汚らしいあの昆蟲を憎んでばかりもゐません。

最初の歌は、少しおどけ過ぎて、下の句などはわるいとおもひます。二番めのわがおもふどちは、おれの仲よしだといふくらの意味で、おれだつて虱とおんなじことだ、とまるで、綿入りの着物の縫ひめに、頭をつゝこんで縮かんでゐる虱ばかりを笑ふことは出来ないといふのです。それを深くおもひ込んだようにいはずに、軽く詠みすてゝゐるのです。

『やをら出で』といふのは、少し説明しすぎてゐますが、下の句の方になると、いかにも自分の人からうけた恥づかしい経験を、そのまま軽い心で歌つてゐるところが見えて、わるい歌

ではありません。この人の先生は、加納諸平と同門の田中大秀といふ飛驒の國の學者でした。その師匠を訪うた時の旅行の歌。

旅衣 うべこそさゆれ。 乗る駒の 鞍の高ねに、み雪つ

もれり

旅装束をとほして、寒さが身に應へると思つてゐたが、

なるほど冷やついたはずだ。あの向うに見える、乗るこまの鞍といふ名まへの乗鞍の高山に、雪が積つてゐる。

この人は、この山を甲斐の國乗鞍山と書いてゐるが、これはやはり只今の飛驒山脈（日本アルプス）の中のあの山でせう。この歌はどうかすれば、馬に乗つて旅をしてゐて、それをす

ぐさままくらことば枕 詞として、鞍くらの高たかねといつたようにも思おもはれるが、
さう考かんがへてはいけません。

二六、大隈言道おほくまときみち

尚なほ明めい治じより前まへの歌人かじんとして、忘わすれることの出で来きないのは、福ふく岡かの人ひと、大隈おほくま言ま道ときみちであります。この人ひとも曙あけみ覽みのように軽かろく
明あかるくあまり考かんがへないで、自じ由ゆうに歌うたを作つくつたらしい人ひとであります。
やゝおもしろさにつり込こまれて、下げ品ひんな歌うたもないでもありません。
けれども、歌うたよみとしては勝すぐれた人ひとといふことが出で来きます。こと
に子こどもらしい氣き持もちを歌うたに自じ由ゆうに詠よみこんだ人ひとで、そんなのに

なると、ついでによいわるいを忘れて、同感せずにもられませ
 ん。しかし曙覽の歌で、さういふ種類の歌をあげすぎましたか
 ら、こゝでは、まじめなものを二三首並べるだけにしておきま
 せう。

うちわたす をち 方人の、道おそく行き果つまじき 野の
 景色かな

これも、歌には少ない材料で、春の野の霞んで果てがなく
 感じられる上に、皆の心ののんびりしてゐる氣持ちが、よく出
 りて、しかも非常に古風に上品に出来てゐます。

うちわたすは、見渡すといふくらゐの意味。をち方人といふ
 のは、向うの方を歩いてゐる人。道おそくとは、足がはかどらな

いでゐる様子ようすを少々しょうく變つたいひ廻まはしていつたのです。つまりさうしないと、平凡へいぼんに上うはすべりがすると思つたのでせう。だから、直ちよくやく譯して、道みちがはかどらないでと取とつておけばよいでせう。とても今日こんにち一日いちにちでは行ききるまい、といふ氣き持ちを、行ゆき果はつまじき野のの景色けしきかな、とかういつたのです。

今いままでの歌うたと違ちがつて、重おもくなるしいけれども、やはりよい感かんじがするでせう。

かへり來きて、寢ねたるわらべの袂たもとより、頭あたま出ひだせるつくく
しかな

かへる雁かり、かへりて春はるもさびしきに、わらはのひろふ小田をだ
のこぼれ羽は

この人は子どもがすきだつたゝめに、同時に、子どもが讀んでもわかるような歌、或は自分が幼い氣持ちになりきつて作つたものがたくさん出來たものらしく思はれます。

春になると雁が、北の方へ歸ります。その後、雁の羽が、田圃などによく残つてゐます。それを子どもが拾つておもちゃにして遊んでゐるのを作つたので、さういふ材料をごく重々しく爲上げてゐるのです。春に歸る雁が、歸つてしまつた後、花は咲いても、子どもは雁の姿が見えないので、『がんく竿になれ棒になれ』といふ童謡を謠ふことも出來ないであるその子ども

のさびしい氣持ちを、春もさびしきといつたので、大人の作者自身の氣持ちを述べたのではありません。さういふ場合に、そん

な子どもが、田におりて行つて、雁のこぼして行つた羽を拾つて
 喜んでゐるといふ歌です。それをすつかり、大人の側から見つて作
 つてゐるのです。

も一つ、子どもを種にしなから、重い歌をあげておきませう。

わが身こそ何とも思はね。めこどもの憂してふなべに、

うきこの世かな

これも、あなた方にわかりにくい氣持ちかも知れません。がお
 父さんお母さんの年ごろになると、家の生活が、よくてもあし
 くて、なんだか社會的の暮しといふものが、重荷に感じられ
 て來るものです。さういふ年ごろになると、この歌を詠んだ言
 道の心持ちがわかるでせう。

言とき道みちもやはり、曙あけみ覽どう同よう様の貧まつしい暮くらしをしてゐました。けれどもそれについて普通ふつうの人ひとでありませんから、大たいして氣きにかけたりあせつたりはしてゐなかつたのです。が時とき々々、もつとよい暮くらしがしたいといふ氣き持もちが起おこらなくもありません。それは多おほくは家族かぞくのものたちが、主人しゅじんに訴うつたばあひ、或あるはさういふ心こころ持もちを顔かほに現あらはしてゐる場合ばあひに起おこつて來くる氣き持もちなのです。

自分じぶんはそれはなんとも思おもつてゐないが、しかし、時とき々々、悲ひ觀かんすべき世せ間けんだ、とおもふ氣きがする。自分じぶんの妻つまや子こが、厭いやだくと世よの中なかのことをいふにつれて、厭いやに思おもはれるこの世よよといふのです。

少すこしもの足たらないところもあります、家いへの主あるじの持もちそんな氣き

持^もちをよくいつてゐます。なべにといふ語^ごは、それと共^{とも}にと同時^{どうじ}
 になどいふ意味^{いみ}ですが、この頃^{ころ}の人は、軽^{かる}くゆゑにといふくらゐ
 の意味^{いみ}にも用^{もち}ひたのです。以^{いじ}上^{じょう}の人^{ひと}々々^{／＼}で、江^え戸^ど時^じ代^{だい}の歌^か人^{じん}
 を代^{だい}表^{ひょう}させたりもります。

青空文庫情報

底本：「歌・俳句・諺」復刻版日本児童文庫、名著普及会

1982（昭和57）年10月20日発行

底本の親本：「歌・俳句・諺」日本児童文庫、アルス

1930（昭和5）年1月10日発行

※底本は旧字旧仮名づかいです。なお拗音、促音の大書きと小書きの混在は、底本通りです。

入力：しだひろし

校正：沼尻利通

2015年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌の話

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>